LOVE SONG～君に逢いたい～

AYU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ～君に逢いたい～

【Ｎコード】
Ｎ７４２５Ｘ

【作者名】
ＡＹＵ

【あらすじ】
インディーズバンドでヴォーカルをしている大地には、大切にしている少女がいた。大学病院で出会ったみのりは心臓に病を持つという。家族の愛に恵まれないみのり。「家族になろう。そのあと恋人になって」と言う彼女の願いを大地は受け止める。一緒に曲を作ったり、ギターを教えたり、静かに愛を育んでいく大地とみのり。だが、みのりに忍び寄る病魔と周りの圧力でふたりは引き裂かれてしまう。
音楽を通して出会ったふたりの、切ない純愛ストーリー。

※本家小説サイトで拍手御礼として連載していた『大地のラブソング』を加筆修正しています。

【1】pure soul

「おつかれー！」

ライブの後の楽屋。バンドのメンバーは皆ビールで乾杯している。インディーズで活動しているこのバンドに、メジャーデビューの話が持ち上がった。
そのせいか、今日のライブは満員御礼。メンバーも客も妙にテンションが高かった。

体温と興奮状態はステージが終わってもまだ冷めず、小さな楽屋の中は熱気に包まれている。
皆が浮かれ騒いでビールを飲んでいるなか、大地は楽屋の片隅のパイプ椅子に座り、ひとりでコーラを飲んでいた。

「なんだよ大地。お前もビール飲め！今日はお祝いだぞ！」
「いや、俺は今日バイクだから……」

ドラムのアツシが「いーじゃん、いーじゃん！」と言ってビールをぐいぐいと勧めてくる。

（やめろよ！このヨッパライ！）

アツシはライブ前からビールを飲んでいて、ライブ中もテンションＭＡＸだった。
よくいえばムードメーカーなのだが、絡み癖があって困る。

「やめとけアツシ。大地はまだ未成年だから、飲酒で捕まったらヤ

バイ」

そう言って絡むアツシを止めたのは、バンドのリーダーの松木祐輔(まつきゆうすけ)。
まだ大学生なのだが、妙に貫禄のあるベーシストだ。

「はぁぁ。こいつまだ18なんだよな〜。酒もやらない、タバコも吸わない。まさか女もまだなんて言わないだろうな？」

アツシが冗談半分に言った言葉に、大地は真っ赤になって横を向く。

「うわっ、マジかよ〜。ステージの上では女をメロメロにさせてる大地クンが、こんな純情ボーイだとは誰も思わないぜ？」

呆れ顔で大地の額をアツシが小突いた。

峰屋敷大地(みねやしきだいち)はバンドの中では最年少で、このあいだ高校を出たばかりの18歳だ。
在学中に松木の誘いでバンドに加入したのだが、その天才的な歌唱力とギターテクで、彼がメンバーになった直後バンドの人気は爆発した。

まだあどけなさの残るベビーフェイス。だが、そのパワフルな歌声は誰をも魅了する。
その一方、歌っているとき以外はあまりしゃべらず、MCの時間に一生懸命カミカミで話す姿に、女性ファンは母性本能をくすぐられるらしかった。

「いいだろ。大地のそんな純情さがいいって女たちが、毎回詰めかけんだから」
「だな。俺たちのファンはヤローどもばっかだけどな」
アツシは笑いながら、他のメンバーのところへ絡みに行った。

周りに誰もいなくなったのを見計らって、松木がこっそりと大地に耳打ちする。
「大地、お嬢が来てるぞ」
「え！？」
目を見開いて、大地はパイプ椅子から勢いよく立ちあがった。
「俺の車の中で待っててもらってるから……ホレ、鍵」
そう言って、松木はセカンドバッグの中から取り出した車のキーを大地に手渡す。
「サンキュー！松っちゃん！」
誰にも見られないように、大地はこっそりと受け取ったキーをポケットにしまい込んだ。
「あとは俺がうまくやるから……くれぐれも、気をつけろよ？」
「了解」

差し出された松木のゲンコツに拳を当ててニコリと笑うと、大地は足早に騒々しい楽屋を抜け出した。

ライブが終わってからだいぶ時間もたっていたので、出待ちをしていたファンの姿ももう見えない。
大地はライブハウスから少し離れた駐車場に停めてある、場違いな高級車に向かって歩いた。
ガラスにスモークが貼ってあるから中は見えないが、きっとあの人が待っててくれてるはず。

大地はリモコンでピピッと車のロックを外した。

「大ちゃん！」

その途端、子犬のように元気よく車から飛び出してきた女の子。

「みのりちゃん！」

飛び跳ねるように抱きついてきたお人形のような女の子を、大地はふんわりと抱きしめる。

「大ちゃん、今日もかっこよかったよっ！」

興奮して目を輝かせ、みのりは大地のほっぺたにキスをした。

「みのりちゃんも、会場で目立ってたよ？なんだっけその服……ピンク……？」

「ピンクハウス？」

みのりが、ゴージャスなフリルのついたそのスカートを片手でつまみあげる。
今日のみのりは、大きなフリフリの襟で、袖がポンっと膨らんだお姫様みたいなワンピースを着ていた。

ところが大地のやっている音楽は洋楽かぶれのハードロック。大地自身も金髪に近い茶髪で、腕にはトゲのついたリストバンドをしている。
メンバーはもちろん、ライブハウスに来る客もそんな感じなので、白いぴらぴらの服を着たみのりは相当会場で浮いていた。

（すごく彼女に似合っててかわいいんだけど……かなり目立ってたな）

おとぎの世界から抜け出してきたような女の子がライブハウスで元気に飛び跳ねていた姿を思い出し、大地は苦笑する。

「今日、俺バイクなんだけど……その恰好じゃ無理だよなぁ」

すると、みのりがニコッと笑って大地に言った。

「着替えちゃんと持って来たよ？ちょっと待ってて！」

車にバタンと乗り込んだ彼女を待つこと5分。
ドアを開けて出てきたみのりは、ジーンズにパーカー姿で、お姫様からフツーの女の子に変身していた。

「かわいいじゃん！」
「でしょー！いとこの果南ちゃんにもらったんだぁ♪」
いつもお嬢様スタイルなので、こういうラフな格好がとても新鮮に映る。
「仕上げに、これを着て？ちょっと汗臭いかもしれないけど……」
そう言って大地は、着ていた皮ジャンを脱いでみのりに手渡した。みのりは一瞬首をかしげて考えるようなしぐさをしたあと、くんくんと匂いを嗅ぐ。
「ほんとに確かめなくていいからっ！」
「ごめーん」
ニコッと笑って皮ジャンを着るみのり。どうやら合格だったらしい。
「うふふ。あったかい」
ブカブカの皮ジャンを着て嬉しそうにする彼女に、用意していたヘルメットをかぶせる。首のベルトを締め、そのまま抱き上げてバイクの後ろに座らせた。
「大ちゃん、私バイク初めて！」
「そうなんだ。病みつきになるよ？」
キーを回し、エンジンをスタートさせる。
アルバイトでようやく買ったアメリカンスタイルの２５０ｃｃのバ

イク。
低いエンジン音と振動が心地よい。
ハンドルに手をかけた大地の体に、後ろからみのりがギュッと抱きついた。
「夜のツーリングに、レッツゴー♪」
みのりの言葉を合図に、夜の街に向かって大地はバイクを走らせた。

【2】出会い

「きゃーきゃー！大ちゃん、すごい風っ！」
「えー！？なに、聞こえないー！」

大地の背中にぴったりと体を押し付け、みのりがなにやら叫んでいる。
いつもはガンガン飛ばすのだが、今日は大事な人を乗せているから無理はしない。
車通りの少ない道を選び、大地は山の上までバイクを走らせた。

小高い山の頂上付近にある展望台。けっこう有名なデートスポットだ。
そこの駐車場にバイクを停め、みのりを抱き上げて下に降ろす。

「なんだか、体がまだぶるぶるしてる～」

バイクの振動が体に残っているらしい。みのりが大地に見せた手のひらは、微かに震えていた。

「怖くなかった？」
「ぜーんぜんっ！だって、大ちゃんが一緒にいてくれるんだもん」

みのりは背の高い大地を見上げ、ニコッと笑いかけた。
大地もつられて、彼女に微笑みかける。

展望台の上は風が強かったが、ふたり寄り添って、きらびやかな夜景を眺めた。

大地とみのりが出会ったのは、大学病院の院内学級だった。
バンドのリーダーの松木は、そのいかつい容姿に似合わず大学でボランティアサークルに入っている。
そして、病院で働いている知り合いから子供たちに音楽を教えてほしいと言われた松木は、一緒にやってくれるよう大地に頼んだのだ。
正直めんどうだなと思ったのだが、松木に世話になっていた大地は、一肌脱ぐことにした。

初めて院内学級に顔を出したとき、そこにみのりがいた。
色が白くて、真っ黒いツヤツヤした髪の、天使のような女の子。
はっきりいって、一目ぼれだった。

「今日はここにいるお兄さんとお姉さんが、みんなに歌を教えてくれますよ」

若くて元気のいい女の先生が、そう言って3人を子供たちに紹介した。
花沢果南（はなざわかなん）というその彼女が、どうやら松木の知り合いらしい。

（へー。松っちゃんも隅に置けないじゃん）

松木が彼女を愛おしげに見る視線が、果南がただの友達ではないことを物語っていた。

授業が始まり、松木がギターを、みのりがキーボードを弾き、大地が歌う。
誰もが知っているような童謡とかアニメソングばかりだったので、子供たちも大喜びだ。
最後には大合唱。あまり子供に接したことのなかった大地だが、その日は心から楽しく過ごせた。

「また一緒にやろう」と約束して別れたのに、彼女はそれから来なくなって。
果南にみのりのことを聞くと、
「あの子はボランティアじゃなくて、この病院に入院してる子なの。ときどきああやって手伝ってくれるのよ」
と教えてくれた。

みのりの病室を教えてもらい、大地は入院病棟に行ってみることにした。
詳しいことはよく分からないが、彼女が入院している循環器科というのは、心臓の治療をするところらしい。

（悪い病気なのかな……）

あまり病気には縁のない生活をしていたので、病院独特の空気に違和感を感じて仕方がない。
肩身の狭い思いをしながらエレベーターで12階までたどり着き、大地はおそるおそる循環器科のナースステーションで看護士に声をかけた。

「あの……花沢みのりさんの病室ってどこですか？」

年輩の看護士は、大地を頭のてっぺんからつま先までジロリと眺めたあと、「ご家族の方以外、面会はできません」と大地の言葉を一蹴(いっしゅう)した。

（ま、そのうちまた会えるさ）

諦めて帰ろうとしたそのとき、

「あー！大地くんっ！」

と、廊下の向こうから大声で名前を呼び、走ってくる少女がいた。このあいだのワンピース姿とは違って病院のパジャマを着ていたが、それは大地が一目ぼれしたみのりその人だった。

「花沢さんっ！廊下を走ってはいけません！それと大声も出さないっ！！」

さっきの感じの悪い看護士に怒られて、みのりは「ごめんなさぁい」とぺろりと舌を出す。

「私に会いに来たんだよね？大地くん。食堂に行こっ」

大地の腕をガシッとつかみ、ぐいぐいと引っ張っていく彼女は、とても病気で入院してるとは思えないほどパワフルだった。

病棟の食堂は談話室も兼ねていて、入院用のパジャマを着た患者と家族らしき人がたくさん座っている。

大地とみのりは、外の景色が見えるカウンターにふたり並んで座った。

「びっくりしちゃったよ～。いきなり病棟に大地くんがいるんだもん」

みのりは、黒目がちの大きな瞳で大地を見上げる。

（うっ。やっぱり超カワイイ）

大地をまっすぐ見つめるその瞳に、大地の胸はドキドキしていた。

「果南さんにみのりちゃんがここに入院してるって聞いて……どっか悪いの？」

「うん。赤ちゃんのとき心臓の手術をしてから、ときどき検査入院してるんだぁ。最近ちょっと不整脈がひどくって」

「ふせいみゃく？」

聞きなれない単語に、思わず聞き返す。

「んとね、私の心臓、いきなり速くなったり遅くなったり、ときどき止まったりするの。あんまり生活には影響ないんだけど、念のため異常を調べてて」

みのりは、なんでもないように自分の病状を言ってのけた。

確かに、重大な心臓の欠陥があったら、あんなふうに廊下を走って

きたりはしないだろう。

「そっかぁ。大変だね。だから家族以外面会できないことになってるんだ」

「そういうわけじゃないんだけどね。だって親もほとんど来ないよ？私は要らない子なんだもん」

「え？どういうこと？」

ケロッとした顔でびっくりするようなことを言う彼女。

大地の問いかけに、みのりは窓の外を眺めながら事情を話してくれた。

「私ね、心臓の形が人と少し違うんだって。一応赤ちゃんのときに手術したけど、完全ではないの。そしたらね、おじいちゃんが『こんな欠陥品、どこにも嫁に出せない』って私のお母さんをものすごく責めたんだって。だからお母さんは、私がまだ小さい頃、花沢の家を出て行っちゃった。お父さんとお兄ちゃんは仕事で忙しくて全然来てくれないしさ～。唯一面会に来てくれる人なんて、いとこの果南ちゃんくらいだよ」

「へー。果南先生、みのりちゃんのいとこだったんだ。そういえば、くりくりした目もとなんかはよく似てる」

彼女の話に対して大地が言ったコメントがおかしかったのか、みのりがクスクスと笑った。

「……俺もさ、親がいないんだよね。ずっと北海道で暮らしてたんだけど、両親が事故でいっぺんに死んじゃってさ。このあいだ一緒

にセッションした松木さんっていたでしょ？あの人んとこで今世話になってる」

自分の身の上なんて人に話したことはなかったのだが、みのりにはなぜか自然に言えた。

みのりが複雑な家庭事情をなんでもないことのように話すから、自分もすんなり話せたのだと思う。

「じゃあさ、じゃあさっ！」

目を輝かせながら、みのりが大地の腕を掴む。

「私たち、家族になろうよっ！で、そのうち恋人同士になっちゃわない？」

「ええっ！？みのりちゃん、家族と恋人じゃ別次元じゃんっ！しかも順番逆だよ、フツー」

そう言ってから、みのりの言葉の意味を考える。

今……恋人同士って言った……？

「え、ええええ――――――！？」

大地は慌てて立ち上がった。

慌てすぎて派手に椅子を倒し、周りの注目を浴びてしまう。

「やだー！大地くんおもしろいっ！」

ケラケラと無邪気に笑うみのり。食堂にいた他の人たちも、皆クスクスと笑っている。
大地は真っ赤になりながら倒れた椅子をなおし、再びみのりの隣に腰かけた。

「私、本気だよ？大地くんカッコイイし、こんなきっかけでもないと私一生彼氏とかできなさそうなんだもん」

みのりが『お願い』のポーズをする。

（やばい……超カワイイ……）

目の前にいるみのりの姿を改めて見る。黒目がちの、ぱっちりした二重の大きな瞳。肌は陶器のように白くてすべすべしている。髪は一度も染めたことなどないのだろう。背中まである、サラサラの艶やかな黒髪。
こんな女の子、自分だって滅多に出会えないし、彼女にできたら超自慢だ。

「うん……わかった。じゃ、まずは家族からスタート？」

大地はニヤケそうになる顔を必死で押さえながら、努めてクールにそう言った。

「そ。よろしくね！大ちゃんっ♪」

満面の笑みで、大地の腕にしがみつくみのり。
こうして、大地とみのりの家族ゴッコがスタートしたのだ。

【3】ファーストキス

夜景を眺めながら他愛もない話をしていると、時間があっという間に過ぎていく。
ライブが終わったあとに出てきたから、１６歳のみのりを連れまわすには遅すぎる時間になってしまった。

「みのりちゃん、そろそろ帰らないと」
「えー！？もう少し大ちゃんとこうしていたい」
「ダーメ。果南さんにも迷惑かけちゃうだろ？」
「……はーい」

みのりは大地にそう諭(さと)され、しぶしぶと展望台の手すりから離れた。
大地が差し伸べた手を握り、名残惜しそうにゆっくりと歩く。
体があまり丈夫でないみのりは、こうやって出歩くことも滅多にできない。大地にもそれは分かっていたが、なによりも心配なのは、みのりの体のことだった。

「ほら、もう手がこんなに冷えてるじゃん」

階段を下りたところで立ち止まり、みのりの両手を手のひらで包んだ。そして、はぁっと温かい息を吹き込む。
その仕草を、みのりは黙って見つめていた。

みのりに『家族になろう』と言われてから約半年。
検査入院の結果、特に大きな問題はなく、彼女は退院して普通の生活に戻っている。

大地はバイトをしながらバンドの練習に励み、時間を見つけて彼女と会っていた。

みのりと会うのは、公園だったりバイト先の近くのファーストフードだったり、とにかく普通の場所だった。
お互いに異性と付き合うのは初めてだから、正直どんなことをしていいか分からない。おまけに、彼氏彼女ではなく、家族としての付き合いだ。一体何をすればいいんだ？

だからたいていはみのりが行き先を決め、大地がそれに付き合う。話すことも他愛のないことばかりだったが、それでもみのりは楽しそうにしていた。

彼女はライブハウスにもよく顔を出した。
心臓が悪いというのにあんな大音量の場所なんかに来て大丈夫だろうかと思ったけど、案外平気みたいだ。

「私、学校の体育の授業だって普通に出てるんだよ？そりゃぁ、他の人より足は遅いけど」
「それって、みのりちゃんのお尻が重いからじゃない？」
「やだぁ！大ちゃんのエッチー！」

ポカポカと殴るふりをするみのりの拳を、大地は笑いながら受け止める。

（そういや、学校に迎えに行ったときは大変だったな）

彼女の通う高校は、ミッション系の私立の女子高。

「校門の前で待っていてね」とみのりに言われていたので、大地はバイクを正門の脇に停め、みのりを待った。

ところが、いつまでたってもみのりは出てこない。
正門から次々と下校していく女子生徒は、大地の姿を見てキャァッと真っ赤になったり、クスクス笑ったりする。
自分がさらしものになっているような気がして、大地はものすごく居心地が悪かった。

結局みのりが出てきたのは、大部分の生徒が下校してからだ。

「遅いよみのりちゃん！めちゃめちゃ恥ずかしかったんだぜ？」

そう言って少し不機嫌になる大地を、みのりが「まぁまぁ」となだめる。

「憧れてたんだよね～、こういうシチュエーション。めちゃめちゃカッコイイ人が校門で待ってくれててさ、他の生徒たちが『誰を待ってるんだろう』って興味しんしんで見てるわけ。で、私が校門から出ていくと、『みのり、待っていたよ』ってその人が抱きしめてくれてさー」

「みのりちゃん、それってマンガの読みすぎ」

呆れてそう言う大地に向かって、みのりはペロッと舌を出した。

そんな感じで、みのりとはゆっくりと心を通わせていた。
ままごとのような付き合いだったが、彼女が望むのは『家族』としてのぬくもりだ。

正直、焦る気持ちもないわけではない。ただ、こういう空気のように安心できる関係も、それはそれでいいと思う。

まるで兄が妹にするように、冷えた手を温める。
するとみのりは、大地の目をじっと見つめ、口を開いた。

「あのさー、大ちゃん。そろそろ私たち、恋人同士に昇格しない？」
「……なんで急に？」

内心ドキドキしつつも、冷静さを装ってそう答える。

「だってさー、ライブ会場で、大ちゃんモテモテなんだもん」

少し拗ねたように、目を伏せる。
今日のライブで、なにかあったのだろうか。

『お前のファンがみのりちゃんに悪さしないように、気をつけろ』

松木に何度も言われた言葉。
確かに、ファンの中には狂信的な奴らもいて、メンバーの彼女が嫌な目にあったことも一度や二度ではない。
大丈夫だろうと思いつつ、何かあったら『大地の妹だ』と答えるようにと、みのりには言い含めていた。
何度も何度も『アンタ、大地の何！？』と言われ、『妹です』と答えているうちに、みのりはファンの間でも『大地の妹』として定着したようだった。

「なんかさー、みんな私のこと『大地の妹だから』ってノーマークで、ちょっと悔しくってさー。今日も、『お兄ちゃん、デビューできたらいいね』って子供扱いなんだよー？」

そう言って、ぷーっとむくれるみのり。

なんだ、そういうことだったのか。

「家族より、恋人の方がよくなっちゃったの？」

クスクスと笑いながらそう聞くと、みのりがコクンと頷いた。

「……じゃ、今日から恋人同士ってことで」

大地はみのりの髪を優しく撫でた。

澄んだ瞳で見上げる彼女が、ふと目を閉じる。

（……正直、俺はずっと恋人のつもりだったよ）

大地はゆっくりと身をかがめ、彼女のさくらんぼのような唇にそっと自分の唇を重ねる。

初めてのキスをするふたりを、満天の星空が包みこんでいた。

みのりの小さな体を抱きしめていると、ふいに携帯電話が鳴った。

『おい。いつまで遊んでるんだ？早く帰ってこい』

松木からの電話だった。

みのりは果南と食事に出かけると言って出てきたらしいので、そろ

そろ送らないとまずい。

「……帰ろうか」

「ん」

恋人になった最初の日。まだまだ兄と妹のような空気感は否めない。でも、少しずつ恋人らしくなっていけたらいいと思う。

バイクでもとの駐車場まで戻ると、そこには松木と一緒に果南が待っていた。

「みのりちゃん、楽しかった？」

「うん！」

「なんかいいことでもあったの？顔がニヤけてる」

「えへへー、ナイショ♪」

いとこ同士の果南とみのりは、それこそ姉妹のように見える。いや、みのりを支える果南は、彼女の姉そのものだった。

「果南さん、遅くなってすみません」

「いいのよ。たまには羽を伸ばさなきゃ。私が一緒だと言っておけば大丈夫だから」

みのりの実家は、不動産業から始まって大企業まで成長した、日本でも屈指のグループ会社を経営しているらしい。

一度松木とともにみのりの家を見に行ったことがあった。ぐるりと敷地を取り囲んだ高い塀。入口には監視カメラも設置されていて、ものすごい威圧感のある家だった。

（お父さんとお兄さんは、仕事で忙しいって言ってたけど……）

あの大きな屋敷で、みのりはずっと寂しい思いをしてきたのだろう。だから大地に、家族の絆を求めたのだ。

（俺が、君を守ってあげるから）

大地は、そんな気持ちを抱きながら、遠ざかるテールランプを見送った。

【4】LOVE SONG

大地の家は、郊外に建っている古い煉瓦造りの一軒家だ。
両親が多額の遺産を残してくれたので、高校を卒業すると同時にこの中古の家を買った。
そこで今、松木と一緒に暮らしている。

1階はリビング、2階が寝室。そして地下には、防音設備の整ったスタジオがある。
バンドの練習がある時はみんなでそこに集まり、とことん音楽にのめりこんだ。

大地の両親は、まだ中学1年だったころに交通事故でふたりいっぺんに死んだ。
家は農場をやっていたのだが、北海道に広大な土地を持っており、それが空港建設の際に高値で買い上げられた。

両親の葬儀のとき、自称親戚が、未成年で一人息子だった大地のそばにわんさかと群がってきた。
まだ13歳だった彼の目の前で繰り広げられる、遺産と親権をめぐる争い。誰もが大地を欲しがった。いや、彼についてくる多額の財産を。

誰を信じていいか分からず、パニックになる大地。だが、遺言で後見人があらかじめ決められていたことが分かり、東京に住んでいるその人のところに預けられることになった。
それが、松木の家だ。

両親とどういう繋がりがあったのかは知らないが、松木夫妻は大地にとてもよくしてくれた。
管財人としての役目も担っていたので、成人するまでは松木夫妻が財産を管理している。そして大地が２０歳になったとき、初めて彼自身が自由に使えるようになるのだ。
良心的なその後見人は、必要なものは何不自由なく与えてくれた。だが、必要以上のものは与えず、大地にお金の大切さも教えてくれたのだ。

その家の二男だった祐輔とは、３つ違いですぐに仲良くなった。大地にギターや音楽の楽しさを教えてくれたのも、彼である。

高校を出るとき、もっと上の大学や専門学校を勧められたが、早く自立したかった大地は進学の道を選ばなかった。
大地は松木夫妻に「いずれ北海道に戻って農場をやりたい。それまでは東京でアルバイトをして生活します」と、２０歳になって遺産が彼のものになるまで、とりあえずここでやっていくと告げた。

自分の故郷は、やはり北海道だ。都会もそれなりに刺激的だけど、やはり終(つい)の棲家はあの広い空の下だと思っている。
大地は音楽と同じくらい、土の感触が好きだった。

今住んでいる家は、松木が通う大学とも近い。
松木夫妻は心配したが、早く自立したいという大地の願いを聞き入れ、この家の購入を承諾してくれたのだ。

＊＊＊

ある日、大地は１階のリビングにあるコンポの前に座りこんでい

た。
レッドツェッペリン、エアロスミス、ガンズアンドローゼズ……CDラックから、何枚かCDを取り出す。
（このあたりだったら、みのりちゃんが知っている曲もあるかなー）
みのりは、再び検査入院することになった。
それで「入院の間ヒマだから、何か音楽ダビングしてきて」と彼女が大地にリクエストしたのだ。
はっきりいって、お嬢様育ちのみのりの好みに合うか分からない。けれど、ライブでもあんなに弾けていたし、『大ちゃんの好きな曲ならなんでも好き！』と言っていたので、「こんなもんだろう」といくつかメジャーな曲をセレクトしてみる。
（そういえば、心臓の音が不規則だって言ってたよな……）
大地は自分の手首に指をあて、脈を調べた。
トントントン……
ミディアムテンポの、ゆったりとした優しいリズム。
そばにあったアコースティックギターを手に持ち、そのリズムに合わせて弦を弾（はじ）いてみた。
（彼女のイメージは、やっぱCコードだな）
みのりの笑顔を思い浮かべる。
明るくて、花のようで……。
いつも学校やバイトが終わったあとに会っていたから、なぜか夕暮

れ時の淡い光の中に立っているみのりの姿が思い浮かんだ。

（こんな感じかなー）

夕焼け空のイメージで、そのリズムに曲をつけてみる。
すると柔らかな曲調の、ミディアムテンポのバラードができあがった。

「いいね、その曲」
「わっ！」

突然うしろから声をかけられ、驚いて振り返ると、そこには松木とみのりが立っていた。

「み、みのりちゃん！？」
「えへへ♪松木さんにお願いして、連れてきてもらっちゃった！」

大地は、みのりに会えた嬉しさと曲を聞かれた恥ずかしさで、かなり心臓がバクバクしていた。

「あ、い、いらっしゃい」

動揺しながらとりあえず挨拶すると、彼女はおかしそうにクスクスと笑う。

「果南のところに用があって行ったら、みのりちゃんにつかまってさ。お前んとこ連れてけってうるさくて」
「なによ～！松木さんが誘ってくれたんでしょー！」

どうやら松木が気を利かせて、みのりに声をかけてくれたらしい。

「あ、俺今からバイトだから。みのりちゃん、帰りは大地に送ってもらって」

「はーい。松木さん、ありがと♪」

松木は出がけに大地を呼ぶと、ポケットから何かを取り出して握らせた。

「必要ないと思うけど……ま、一応エチケットとして」

ニヤリと笑い、手を振りながら玄関を出ていく松木。

手のひらをそっと開き、手渡されたものを見てみると……

「松っちゃん……！」

大地は慌ててジーンズのポケットにそれをしまい込んだ。

心臓がバクバクしている。

（カンベンしてくれよ～）

「松木さん、なんだって？」

「どわっ」

いきなり背後から声をかけられ、驚いて飛び退いてしまう。

「ぷぷ。大ちゃん、びっくりしてばっかり」

みのりがケラケラと笑った。

（みんなして、俺で遊びやがって）

ポケットに入っているやっかいなブツ。みのりに気付かれなかったかとヒヤヒヤしたが、どうやら彼女は見ていなかったらしい。付き合ってるんだから、そういう欲望がないわけではない。けれど、心臓が悪い彼女に触れるのは、やはり躊躇（ちゅうちょ）してしまう。

「お茶いれるから、ソファに座ってて？」

動揺を隠しながら声をかけると、「はーい」と言って彼女は戻っていった。

キッチンでふたつのカップに紅茶を入れ、トレーに乗せてリビングに向かう。

すると、大地がさっきまで弾いていたギターをみのりが腕に抱えていた。

「ギターってよく分からないや。ピアノだとドレミファソラシドが順番に並んでるけど、ギターってそうじゃないんだね」

「ちょっとだけ練習してみる？」

大地はトレーをテーブルに置き、みのりのすぐ横に座った。

「ちょっと貸して」

彼女持っていたギターを手に取り、ドレミファソラシドのコード

を弾いてみる。

「すごーい！私もやってみる！」

みのりは、胡坐(あぐら)をかいていた大地の膝の上にちょこんと座った。

「み、みのりちゃんっ！」

腕の中にすっぽり入ってしまうほど、小さな体。髪の毛からは、ふんわりといい匂いがする。

大地はポケットの中に身をひそめている、松木から渡された避妊具のことが急に気になりだした。

（我慢してくれよ……俺の下半身）

そんな大地の葛藤を知ってか知らずか、みのりは振り返って彼の顔を見上げ、ギターの練習を催促する。

「えっと……これが『ド』」

みのりの手に自分の手を重ねてネック（※）を抑え、右手で弦をはじく。

「わっ！すご～い！」

ふたりで次々と音階を奏でてみる。

音が出るたびにいちいち喜ぶみのりは、子供みたいにかわいかった。

「ねぇ、さっきの曲、なんていうの？」
「さっきの曲？」
「私が来たとき、大ちゃんが弾いてた曲」
「あ～、名前はないんだ。適当に作ってみただけ」

さっき弾いていたメロディを、もう一度奏でてみる。
みのりは目を閉じて、その曲に聞き入っていた。

「これ録音して？私、入院してる間にこの曲に歌詞をつけてみるから」

大地はテープレコーダーの録音スイッチを押し、もう一度その曲を弾いた。
彼女をイメージして作った曲。それにみのり自身が詞を書いてくれるという。

ひととおり弾き終わり、録音スイッチを解除する。
するとみのりが、大地のほうを見てこう言った。

「ねぇ、この曲のタイトル考えたよ。『大地のラブソング』なんてどう？」
「ええ――――！？」

ダイレクトなそのネーミングに、ひっくり返りそうになる。

「せ、せめて『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』にしとこうよ……」
「んじゃ、『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』ね」

みのりはニコッと笑い、その曲の入ったテープをカバンの中にし

まった。

※ネック……ギターの柄の部分

【5】宣告

バンドのメジャーデビューが決まった。
もちろん、松木の両親は大反対だ。

「大地君を巻き添えにして！」

松木自身がどうこうというよりも、まだ未成年の大地がメンバーに入ることのほうが心配だったらしい。
松木とともに、大地は必死で説得した。
結果、大学はしっかり通うこと、法に触れることは絶対にしないことなどの条件で、なんとかＯＫをもらった。

”Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎ（バーミリオン）”。意味は朱色。
それがバンド名だ。
なんかよく分からないが、楽曲とルックスを売りにするようで、金色に近かった髪の毛を、バンド名にちなんで全員赤っぽく染めさせられるらしい。
メンバーのなかには、楽曲だけじゃなくバンドのスタイルそのものに口を出してくる事務所側に腹を立てているヤツもいた。
条件を飲めないメンバーは脱退し、大地と松木、ドラムのアツシだけが残った。

大地がギターとヴォーカル、松木がベースを担当する。
キーボードにひとり追加して、４人のメンバーでデビューを飾ることになった。

「へぇぇ、すごいね！」

レコード会社がくれた、デビュー曲のデモテープ。
アップテンポで、ギターソロの部分がめちゃめちゃカッコイイ曲だ。
そのデモテープをウォークマンで聞きながら、みのりが目を輝かせた。

みのりはあまり体調が良くないらしく、検査入院の日からずっと退院できずにいる。
ほとんど毎日見舞いに行っているので、大地は病室まで顔パスだ。
大地が来るとみのりが元気になるので、看護士も今では歓迎してくれていた。

「シングルとミニアルバムを同時にリリースするんだ。曲作りが大変だよ」

ベッドサイドでそう言うと、みのりが首をかしげる。

「ライブでやってた曲はダメなの？」
「あれはもう、インディーズのアルバムに入ってるし。ああ、そういえば……」

大地は、事務所から渡された書類を取り出した。

「みのりちゃんが詞を書いてくれた曲あったでしょ？あれ、シングルのB面にすることになって」
「ええ――――！？ほんとにっ！？」

みのりが大声を出したので、通りかかった看護士さんがシーっと指を立てた。

「参ったよ……みのりちゃんが書いてくれた詞、全部英語だったろ？あれ覚えんの大変なのに、松っちゃんもレコード会社も気に入っちゃってさー」

「大丈夫だよ。大ちゃんの英語の発音きれいだから」

あのとき作った『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』という曲。
みのりが書いてくれた歌詞を見て大地はぶっ飛んだ。

（冒頭からラストまで、全部英語じゃん――――！！）

一応高校は出ていたが、あまり勉強が好きではない大地。
ライブで英語の歌を歌うこともあるが、ＣＤを聞いてヒアリングで覚えただけだし、意味なんて考えたこともない。

松木に歌詞の内容を見てもらったら、
「……英語の歌詞でよかったよ。すっごい熱烈なラブレターじゃん。日本語でなんて、恥ずかしくてとても歌えん」
と言われた。
歌詞の翻訳も頼んでみたけれど、「自分で調べろ」とあっさり却下された。

「それでさ、著作権とかなんとかで、みのりちゃんにもサインしてもらいたいのがあるんだって。……で、未成年だから、一応保護者の同意も欲しいって言うんだけど……」

これだけ頻繁に病院に来ているのに、みのりの家族には一度も会ったことがない。
あの日以来、みのりが家族のことをふたたび話す事もなかった。
「う～ん、お父さんは忙しいし……お兄ちゃんでもいいかなぁ。おじいちゃんは絶対反対すると思うから、ばれないようにしなきゃ」
そう言うと、みのりはピピピっと手早く携帯でメールを打った。
「ごめんな。変なこと頼んで」
「いいのいいのっ！お父さんやお兄ちゃんは忙しくてあんまり会えないけど、私の頼みは聞いてくれるから」
携帯をパタンと折りたたみ、みのりが大地にほほ笑む。
「大ちゃん……夢が叶って、よかったね」

＊＊＊

次の日、いつものように病室に見舞いに行くと、見慣れない人物がそこにいた。
「うちのお父さんだよ」
初めて会ったみのりの父親は、娘に会っても病状を尋ねる事もなく、トラブルの視察に来ている政治家のように淡々としていた。
回診に来た医師と二言三言話したあと、「もう用は済んだ」と病室を出ていくみのりの父親。
大地は、契約書のお礼を言おうと彼のあとを追いかけた。

「峰屋敷大地くん……だったね。ちょっと付き合ってくれないか」

威厳のある、いかにも実業家といった風貌の花沢にそう言われ、大地は黙ってついていく。

彼が向かった先は病院の地下駐車場。そこに、黒塗りの高級車が停まっていた。

花沢と一緒に、後部座席に乗り込む。運転席には、彼の秘書なのだろうか、立派な仕立てのスーツを着た若い男性が座っていた。

「みのりの兄です」

その男性は大地に向かってそう告げた。

みのりの兄？病院まで来ているのに、妹の顔を見に来ようともしないのに？

彼女は、『家族は忙しいから自分に会いに来ない』と言っていた。だが、彼女の言うことと今の状況は、かなり食い違っている。みのりが家族の存在を欲したわけ。大地には、それが分かったような気がした。

隣に座ったみのりの父親が、ビジネスバッグの中から何かを取り出す。

「なんですか、これ」

目の前に差し出された、白い封筒。

「投資だ」
「投資？」
「君の音楽を聞いたよ。いい仕事をしている」
「いい仕事……ですか」
音楽をビジネスとしか考えられない連中は確かにいる。所属している事務所も、その類だ。
この人も……みのりの父親も、やはりそうなのだろうか。
「ここに５００万入っている。これで、みのりの前から姿を消してほしい」
大地の音楽。娘であるみのり。そして、５００万もの大金。
「……意味が分からないんですけど」
音楽しかないこんな自分じゃ、娘にふさわしくないから身を引けというのだろうか。
すると、大地を見る花沢の表情が少し緩んだ。
「私は、君の所属するレコード会社のスポンサーをしている。君の歌を聞かされたときは、鳥肌が立ったよ。すごい才能を持っている」
ますます意味が分からない。だからどうだというのだ。
「君は、絶対に売れるだろう。いや、絶対に売ってみせる。……だが、そうなって辛い思いをするのは、みのりだ」

「……みのりちゃん？」
「ああ。みのりの病気のことは聞いているかね？」
「はい……不整脈っていうのは……」

小さい頃に心臓の手術をして、今は不整脈で検査入院をしている。みのりは、大地にそう言った。

みのりはただの検査だと言っていた。見た目も元気そうだから、大地は彼女の言葉を信じていた。
けれど、それは違うというのだろうか。

「みのりは、先天的な心臓の欠陥がある」
「それは、本人に以前聞いたことがあります。赤ちゃんの頃に手術したって」
「確かに一度、手術をした。ただ、みのりの病気は進行性の難病なんだ」
「え？」

「みのりは……そう長くは生きられない」

そのあと、どうやって家に帰ったか全く覚えていない。
気がつくと、大地は自分の部屋で大音量でＣＤを鳴らし、狂ったように声を張り上げていた。

みのりの父親が言ったことが、いつまでも耳に残っている。

自分たちがメジャーデビューすることで、周りは確実に騒がしくなるだろう。
みのりの心臓が抱えている爆弾は、いつ爆発するか分からない。
長生きして、普通に生活している人もいるらしい。だが反対に、ある日突然亡くなる人もいるそうだ。

大地のそばにいて心身に負担がかかれば、それだけ発症のリスクが高くなる。
だからあの５００万で娘の前から姿を消してくれ、それがみのりの父親の話だった。

「くっそ――――！！」

大地は、手元にあったギターを、壁に向かって力いっぱい投げつけた。

【6】secret live（1） side－大地

デビューシングルとミニアルバムが同時に発売され、にわかにまわりが騒がしくなる。

テレビやラジオへの出演。雑誌のインタビュー。
もちろんライブも続けているが、客の動員数が大幅に増え、今までの狭いライブハウスは使えなくなった。

メディアへの露出が増えたせいで顔も知られるようになったが、大地は相変わらずみのりの病室を頻繁に訪れていた。
もちろん、病院のスタッフや入院患者も、大地がメジャーデビューしたことは知っている。
いろんなことが変わるかもしれない。そう思っていた大地だったが、みんなの変わらぬ笑顔にほっと胸をなでおろしていた。
「テレビで見るよりオトコマエね～」「応援してるよー」と気さくに声をかけられ、嬉しいやら恥ずかしいやら。
でも、みんなが温かく見守ってくれるのは、なによりみのりの明るいキャラクターのおかげだと思う。

「あー！！来た来た、大ちゃ～ん！」

ある日食堂の方へ行くと、テレビの大画面の前にスタッフや病棟の人たちが集まっていた。

「ちょ、ちょ、ちょっとみのりちゃんっ！　何見てんだよ～！」

みんなが集まって見ていたのは、このあいだ出演したＳステという音楽番組の映像だ。
司会の人とのトークのあとに、ステージで歌を歌う。
スタジオでの収録だったのだが、会場にはちゃんと客もいて、ちょっとしたライブ感覚でけっこう楽しめた。

「ぷぷぷ。大ちゃん、かっこつけてておもしろい～」

何がおもしろいのかよく分からないが、みのりがやたらウケている。

「なんか変だった？」
「ううん、せっかく司会の人が話を振ってるのに、全然しゃべらないんだもんっ！」

……そういえば、そうだったな。
バンドのリーダーの松木とヴォーカルの大地がやたらと話しかけられたが、大地は緊張しまくってなにも話すことができなかった。
それで代わりに、横にいたアツシが質問に答えたのだ。

「いや、かっこつけてたわけじゃないんだけどさ～」
「分かってるよ？ライブでも大ちゃん、あんまりＭＣやらないもんね。で、ドラムで後ろにいたはずのアツシさんがいつの間にか前に出てきてしゃべってて……」

そこまで言うと、またみのりがケラケラと笑いだした。

「みのりちゃん、笑いすぎだよ……」

呆れてそう言うと、一緒にテレビを見ていた中年の女性が大地に話しかけてきた。

「大地くんがテレビに出るようになってもあんまり変わんなくて安心したわ。みのりちゃんも、『もう大ちゃん、来てくれなくなっちゃうかも』って心配してたからさ」

目の前で楽しそうに笑っているみのりが、そんなことを言ってたなんて。

そういえば、彼女は病気のことや家族のことで辛い思いをしているはずなのに、あまり泣きごとは言わない。

笑顔の裏に、どんな想いを抱えているのだろう。

帰り際、エレベーターホールまでみのりが大地を見送る。

いつもはそこで「またね」と別れるのだが、エレベーターが到着する直前、大地はみのりをエレベーター脇にある非常階段へと連れ出した。

彼女を抱きしめ、その唇にキスをする。

また、少し痩せたみたいだ。

みのりが大地の背中に、そっと手のひらをのせる。しばらくそのまま、大地とみのりは静かにお互いを抱きしめあった。

正直、みのりの父親が何か言ってくるかもしれない、という不安もあった。

病院のスタッフに面会を拒否されるかもしれない、と覚悟もした。

けれどそんなことは一切なく、花沢からの接触もあれ以来なにもない。
デビューにあたってスポンサーへの挨拶もしたが、そのときも代理のスタッフと会っただけだった。

あの人は、こうしてまだ自分がみのりと会っていることを、知っているのだろうか。
たぶん……知っているとは思う。
あれだけの権力を持っている人物だ。調査することなんて、簡単なことだろう。
なのに、何も言ってこない。

あのとききっぱりと、花沢は大地にみのりの運命を告げた。なのに娘と会うのをやめない愚か者だと思っているのかもしれないな。
みのりを励ましたい、という気持ちはもちろんある。
だが、それ以上に自分がみのりに会いたいのだ。

言ってしまえば、自分だってみのりの存在に生かされている。

「大ちゃん……もっと一緒にいたい。大ちゃんの歌が聞きたい」

みのりが大地の胸に顔をうずめたまま、小さな声で言った。
大地は少し迷ったあと、ジーンズのポケットに入れていた一枚の紙切れをみのりに差し出した。

「いつものライブハウスで、シークレットライブをやるんだ。メジャーデビューしちゃったけど、今まで応援してくれたみんなへの気持ちを忘れないって意味で」

みのりの体のことがあったから、このチケットを渡すかどうかすごく迷った。
でも、こういう小さなライブハウスでやることも、もうできなくなるかもしれない。

みのりは手を伸ばしてそのチケットを受け取った。

「ありがと。大ちゃん有名になっちゃったし、もう間近で大ちゃんの歌を聞くこともできないかと思ってた」

そう言って、大事そうにそのライブチケットを抱きしめる。

「じゃ、体調バッチリにしておいで。風邪なんかひいたらダメだからな」
「うん！大ちゃんの歌を聞くためなら、おとなしくベッドで安静にできる！」
「あはは……みのりちゃんってば」

次のエレベーターに乗り込むとき、彼女はすっかり笑顔になっていた。

よしっ！！
シークレットライブ、彼女のためにがんばるぞっ！

＊＊＊

そしてライブ当日。

「な、なんか、すごくね？」

一部のインディーズ時代からのファンにしか知らされてなかったはずの今日のライブ。
会場の前には恐ろしいほどの客が詰めかけていた。

「みのりちゃん、大丈夫かな……」

そう呟くと、そばで聞いていた松木が俺の背中を叩いた。

「今からライブだっていうのに、お前はみのりちゃんの心配かよ。大丈夫。果南がついているから」
「だよね。でも、なんだか心配だったからさ」

ライブのチケットを渡したものの、大地はやはり来るのをやめさせようと何度も考えた。
みのりの病状がどれくらい悪いのかは分からない。けれど、入院期間はすでに2カ月を超えていたし、検査の回数も増えていると聞く。

（もしかして、あんまり良くないんじゃないのかな……）

『いつ爆発するか分からない爆弾を抱えているようなものだ』

そう言った、みのりの父親の言葉を思い出す。
何とか外出許可はとりつけたと言っていたけど、みのりのことだから、こういったライブに参加するのが理由だとは言っていないだろう。

――――何も、起こらないといいけど。

【7】secret live（2） side－松木

ステージが始まる前の楽屋。
大地はパイプ椅子に座り、ギターの最後のチューニングをしている。
ギターの弦の張りを調節し、音に狂いがないようにするのだ。
音叉（おんさ）やチューナーを使うやり方が一般的だったが、絶対音感を持つ大地は、そういった器具に頼らず必ず自分の耳で音を聞いて調整する。
松木は、自分のベースをチューニングしながら、その様子を見つめていた。

大地と出会って、5年。弟のような存在の大地に音楽を教えたのは、誰でもないこの自分だ。
松木は今ではベース担当だが、かつては大地と同じようにギターを弾いていた。
スポンジが水を吸収するように、見る間にギターのテクを身につけていく大地。
その才能に嫉妬したこともあったが、今では、大地こそ音楽の神に愛された存在だと思っている。

それだけ大地には、他に類を見ない特別なものがあった。

練習の時に誰かが音をはずすと、必ず大地が指摘した。
数人のサポートメンバーが入っても、誰がどのパートでミスをしたか言い当てるのだ。
些細な音のずれに違和感を感じるらしい。
「松っちゃん、さっき音はずしたでしょー。うまくごまかしてたけ

ど、バレバレだし」

バレバレだと思っているのは、たぶんその場にいた人間のなかでは大地ただひとりだと思う。
松木自身、かなりのベースのテクを持っている。だから、たとえ音をはずしたりフレーズを間違えたとしても、まるでアドリブだったかのように弾きこなすことができる。
ただ、大地だけは必ずそのことに気付くのだ。

ギターを弾きながら歌を歌い、なおかつ他のメンバーの音も聞き逃さない。
そんな大地の才能を、松木は天性のものだと感じていた。

一心に弦を見つめ、コードを奏でる大地。
普段のあどけない少年のような瞳は、ライブのときだけは情熱の炎を宿す。

最近は、声に色気も出てきたような気がする。
みのりの存在が、大地にインスピレーションを与え、情感のこもった音楽を作り出させるのだろう。

（参ったな……これはファンの女どもが、大地にメロメロになるわけだ）

松木は、そんな大地の姿を見て苦笑した。

ライブ開始5分前。

舞台のそでで、客席の様子をうかがう。
小さなライブハウスは超満員で、入りきれなかった客が会場の外にもあふれていると聞く。

「果南から連絡があって、最前列のど真ん中にふたりでいるそうだ」

松木がそう言うと、大地は驚いたように目を丸くした。

「あのふたり、どうやって最前列にもぐりこんだわけ！？」

それは、松木自身が仕組んだことだった。
あらかじめスタッフに頼みこみ、一般客が入場する前に特別にホールに通してもらったのだ。

果南から、みのりの病状を聞いていた松木。
大地も、今日のシークレットライブには特別な思いを抱いているようだ。
果南がついているのだから、間違いはないだろう。

今日の感謝祭は、かつての対バン仲間も前座として参加してくれている。
彼らの演奏が間もなく終わり、いよいよＶｅｒｍｉｌｌｉｏｎの出番だ。

「よっしゃ！感謝祭、気合い入れていくぜっ！」

メンバーで円陣を組み、リーダーである松木がそう叫ぶと、全員の目つきが変わる。

会場の照明が落とされた。
その間にドラムのアツシやバックバンドのメンバーがそれぞれスタンバイする。

歓声と熱気が、会場を埋め尽くしている。
何度もステージの上に立ってきたが、この緊張感と高揚感はたまらない。

「よし。大地、いくぞ」

松木の言葉を合図に、大地と松木もステージに飛び出した。

「感謝祭、気合いいれていくぜぇぇ――――――!!」

大地がステージで叫ぶと、会場が歓声で震えた。
心臓に響く、ドラムのビート。続いてベースがリズムを刻む。

客席をひととおり見渡すと、みな拳を振り上げ熱狂している。

インディーズのナンバーで、一番盛り上がる激しいロックの曲。
この曲で始めようと、メンバー全員一致で決めていた。
松木がベースを奏で、大地はギターをかき鳴らしながら叫ぶように歌う。

会場全体が一体となって、歌に合わせて踊り狂っている。

ステージの真ん前にいる果南やみのりも、小さい体を飛び跳ねさせながら、リズムに乗っていた。

飛び散る汗。

そして、この熱気。

メジャーデビューできたくらいだから、このバンドの総合的なレベルは低くはない。

だが、これだけ人を魅了するステージを作り上げることができるのは、大地の存在があるからだ。

ギターテクももちろんすごい。ただ、あの歌唱力は圧倒的なものがある。

魂の叫び。

大地の歌を聞くと、松木自身魂を鷲掴みにされる。

天性のヴォーカリスト。誰もがその声に魅了された。

立て続けに3曲、激しいアップテンポの曲が続く。

今日の大地は、とにかく声の伸びがすごかった。大地のパワーに引っ張られるように、松木も他のメンバーも潜在能力の１００パーセントを引き出せた。

客のテンションも今までで最高だ。

熱い。

このステージの熱さが、たまらない。

曲の合間に、今度はベースをギターに持ち替え、大地と松木のギターバトルが始まる。

ニコニコと笑いながらギターの早弾きをする大地は、おもちゃに夢中になっている子供みたいだ。

だが松木も負けていない。熟練されたギターテク。

ふたりの饗宴に、オーディエンスも盛り上がる。

よく、こうしてセッションしたよな……。

楽しそうにギターを弾く大地を見て、松木は静かに微笑んだ。

【8】secret live（3） side－大地

ステージは最高潮に盛り上がり、ＭＣの時間になった。
ギターを弾いたり歌ったりするときはカリスマ的なオーラを発する大地だが、ＭＣのときだけは素の１８歳に戻ってしまう。

ＭＣの時間がとても苦手だったが、今日はどうしても伝えたいことがあった。

「えっと……はっきりいってしゃべるのは苦手なんですけど、今日は皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思って、頑張ってＭＣをさせてもらおうと思います」

歌っている時はバンドマンらしくキメているけど、ＭＣになった途端に礼儀正しく敬語になってしまう。
そんな大地の姿を見て、最前列のみのりが笑っている。

「このライブハウスを拠点として、インディーズでやってきた俺たちですが、このあいだ正式にメジャーデビューをさせてもらいました。それもみんな、今ここにいる皆さんのおかげです」

一呼吸置いて、会場を見渡す。

「次に歌う曲は、俺の大事な人のために作った曲です。愛を込めて。『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』」

ミディアムテンポの、あったかい曲。
みのりのために作った曲だったけど、今日は会場のみんなのために

歌いたかった。
この想いを伝えたい。君にも、会場に来てくれたみんなにも。
目の前にいるみのりは、涙を流している。
（泣かなくていいよ。俺は、絶対に変わらない。ずっと君のそばにいるから）
心をこめて歌い上げる。
会場にいるみんなの大合唱が、大地の心にも響く。
そして最後は、大歓声と拍手の渦に包まれ、大地は最高に幸せだった。

ライブは最高潮に盛り上がり、とうとうラストの曲になった。
最後に歌うのは『Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎ（バーミリオン）』。デビュー曲だ。
（バンド名をデビュー曲にするあたり、いかにもっていう感じで照れるんだけど）
派手なドラムの音で始まるこの曲は、１６ビートでかなりアップテンポだ。
客席のテンションも高い。
大地もほとんどトランス状態で、自分たちとオーディエンスの一体感を感じていた。

「ＤＡＩＣＨＩ――――！！」

大歓声とともに、会場の熱気が限界を超えた。
そのときの映像は、今でも脳裏で鮮明に蘇る。

スローモーションで、観客の波がステージに押し寄せる。
その波にのみ込まれていく、白い服の少女。

すべての音が、一瞬止まった。

「みのりちゃん！？」

大地はマイクを放り投げ、ステージから飛び降りた。
最前列にいたはずの、みのりの姿が見えない。
果南が、真っ青な顔で重なりあった人の山をかきわけようとしている。

スタッフが、押し寄せるファンを体を張って止めている。
外にいた警備スタッフも応援に駆けつけるが、限界まで客が入ったライブ会場に、まるで身動きがとれないようだ。
とにかく無事だった客を外へ誘導し、事態の収拾を図る。だが、パニックになった集団を避難させるのは予想以上に困難だった。

バンドのメンバーもステージから降り、将棋倒しになった観客を抱き起こす。

「どけっ！！」

大地は、必死で人の山の一番下になってしまったであろう少女の姿を探した。
頼むから、無事でいてくれ！

ようやく、白いフリルのついた洋服の一部を見つけ、人の山から引っ張り出した。

「みのりちゃん！」

真っ赤な顔をしたみのりの呼吸は乱れている。そして、何度呼びかけても意識が戻らない。
脈を測っている余裕などなかったが、抱きしめると、明らかに異常なほどの心拍数を感じる。

「ダメだ！みのりちゃん、しっかりして！」

揺さぶったりしては余計にまずいかもしれない。大地はひたすらみのりの体を抱きしめ、その名前を呼び続けた。

ようやく救急車が到着した。
みのりをはじめ、意識のない人やケガをした人が次々と運び出され

る。

「俺もついていく！」

大地はみのりの手を握り続けた。

だが会場の中も外も、将棋倒しになったこの状況とステージを降りたメンバーの姿を見て、さらに興奮状態が増している。

「みのりのことは大丈夫だから！松木くんと大地くんは、これ以上パニックが起こらないように楽屋に戻って！」

果南がそう言ったが、彼女の無事を確かめるまではそばを離れたくないと、大地が首を振る。

「いやだ！俺も一緒に行く！みのりちゃんが……死んでしまう」

「大地！」

松木に頬を叩かれ、はっとする。

「みのりちゃんは大丈夫だ。果南に任せて、俺たちは一度引っ込むぞ。……たぶん、事情聴取がある」

今のこの状況が、大地にもようやく理解できた。

メジャーデビューを果たしたＶｅｒｍｉｌｉｏｎ。大地はそれまで、自分たちの影響力がどれほどのものかよく分かっていなかった。

この事故で、今後の活動にどんな影響が出るのか。関わった人たちに、どれほどの迷惑をかけてしまったのか。

安易に「感謝祭をやろう！」と言い出した自分の浅はかさに腹が立

つ。

「すみません……。みのりちゃんのこと、お願いします……。あとで電話するんで……」

果南にそう言い残し、大地と松木は人ごみをかき分けて楽屋へと戻った。

楽屋では、バンドのマネージャーとライブハウスの店長が青い顔をしてパイプ椅子に座っていた。

「とんでもないことになった」

そう呟くマネージャーの横で、バンドメンバーは何も言えずにただ立ち尽くしている。

「どうなるんですか、俺たち」

アツシがそう聞くと、マネージャーは無言で首を振った。

「よければ活動自粛、最悪、無期限で活動停止だ」

「ふざけんなよっ！」

アツシがそばにあったパイプ椅子を蹴り倒す。そんなアツシをなだめるように、松木が肩に手を置いた。

そのとき、誰かの携帯の着信音が楽屋に鳴り響いた。
一瞬全員が息を飲み、松木がテーブルの上に乗せてあった携帯電話をとる。

電話の向こうで誰かが何かを言っているようだったが、全く聞き取れない。
松木は無言でそれを聞き、ときどき「はい」と相槌をうっている。

シンと静まり返る楽屋のなかで、パチンと携帯電話をたたむ音がやけに響いた。

「バンドは……解散だ」

【9】雨

Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎのデビュー騒動は、あっけなく幕を閉じた。ライブハウスの将棋倒しの事件で、スポンサーの娘が巻き添えになったというのが決定打となったらしい。
デビュー直後のまだ無名のバンドが起こした事故は、ニュースに取り立たされることもなく、すぐに人々の記憶から消え去っていった。

「果南さん、みのりちゃんの様子……どうですか？」

果南が勤めている大学病院を尋ねる。こころなしか、彼女もだいぶ疲れているようだ。

「ごめんね、大地くん。あの事故のとき、私がみのりを連れていったことがばれちゃって、私も転院先を教えてもらえないの」

果南もみのりの居場所を探しているらしいが、手掛かりさえ見つからないという。
松木や大地と深く関わっていた果南自身も、花沢家ではかなりまずい立場にあるらしい。
もうすでに社会人として自立しているので経済的には問題ない。ただ、みのりに連絡を取ろうとしても全く取り次いでもらえないらしいのだ。

あのとき救急車で運ばれた彼女。
警察の事情聴取で、軽傷を負った人はいたけれど、重症を負ったり

亡くなったりした人はいなかったと聞いて、大地たちは少なからず安堵した。

けれど、そのあとみのりの入院していた病院を見舞った大地は、看護士から彼女の転院を知らされることとなる。

「転院先を教えてあげたいけど、守秘義務というのがあってね」

申し訳なさそうに看護士が言う。

すっかり病院のスタッフとも仲良くなっていたけれど、病院の規則でみのりの居場所は教えられないらしい。

彼女がいた病室を覗いてみる。すると通りかかった患者が、大地にその日のことを教えてくれた。

「かわいそうにねぇ……。すっかり意識を失っていたのに、応急処置だけされてまたすぐにどこかへ連れて行かれたんだよ」

あの事故の日、みのりはこの病院に一旦は運び込まれたらしい。応急処置が終わると、黒ずくめの男たちが数人、慌ただしく彼女の荷物をまとめて持ち去ったという。

「みのりちゃん……」

一目、彼女に会いたかった。

みのりの無事を確かめて、その笑顔が見たかった。

ライブハウスの事故の余波は、思わぬ方向にも広がった。
事務所側からの違約金の支払いを命じられたのだ。

そして、みのりの実家である花沢グループからの圧力が、松木の両親にかけられた。
松木の家は建設業を営んでいる。不動産関係に強い花沢グループから睨まれているという噂が立ち、仕事のキャンセルが相次いだのだ。

「大地くんは心配することないんだよ？」

松木夫妻はそう言うけれど、大地らが思っていた以上に花沢グループというのは強大な力を持っており、厳しい立場に追い込まれているらしい。

「俺は音楽から身を引いて、実家の事業を手伝うことにした。だけどおまえは音楽の才能がある。絶対にあきらめるな」

松木は覚悟を決めたようだ。
花沢の力でつぶされかけている、松木の家の事業。
大地もできるなら力になりたいと思ったが、高校しか出ていない大地には、何もすることができなかった。

松木と住んでいたこの一軒家。だが彼は実家に戻り、今、この家には大地ひとりしかいない。
ソファに仰向けになり、外で降りしきっている雨の音を、ただ黙って聞いている。

あれから、ギターにも触れていない。
もちろん、歌う気分にもなれなかった。

自分の無力さを改めて痛感する。
いかに周りに支えられてきたか。松木の家の支えがあったからこそ、大地は両親がいなくてもやってこれたのだ。
その松木家が窮地に立たされている。けれど、自分には何もできない。
ただ、じっと雨の音を聞いているだけ。

ピンポーン

玄関のドアチャイムが鳴る。
この場所を知っているのは、バンドのメンバーと事務所の人間だけだ。

めんどくせーな。

大地は無視を決め込むことにした。

リビングの窓ガラスがコンコンと叩かれる。

「大ちゃん……？」

その声にハッとして、外を見る。
みのりが傘もささずに、庭に立っていた。

「みのりちゃん！！」

大地はガバッと起き上がり、窓を開けてみのりを部屋に招き入れた。
彼女はずぶ濡れで、体もすっかり冷えて震えている。
とりあえず毛布でくるみ、体を温めるために風呂に湯を張った。

「大ちゃん、会いたかった」

毛布にくるまったみのりが、大地の胸にもたれかかる。
大地はその小さな体をギュッと抱きしめた。

「あれからどうしていたの？病院に行ったけど、転院したって聞かされて……」
「家に、閉じこめられてた」

みのりは部屋から出してもらえず、電話も取り上げられ、専属の看護士とともに部屋で軟禁状態だったという。

「ごめんね、心配かけたよね。私のせいで大ちゃんにいっぱい迷惑をかけて、本当にごめんなさい」

黙って彼女を抱きしめ、濡れた髪をタオルで拭く。
悪いのは、自分のほうなのに……。大地は後悔の気持ちに苛(さいな)まれた。

「体……大丈夫だった？あんなふうに押しつぶされて……」
「うん。それは大丈夫。でも……」
「ん？」

そのとき、風呂の準備の完了を知らせるメロディが鳴った。
「とりあえず、先に体を温めて？そのあとゆっくり話を聞くから」
「うん」
みのりが風呂に入っているあいだに、濡れた服を乾燥機にかけた。
彼女と今までのような関係を続けられないことは分かっている。
自分の今後さえ見えてこないのに、どうして他の人間を守ることができるだろう。
無力で、ちっぽけな自分。
でも、心の底から彼女を愛していた。
（俺は、いったいどうすれば……）
リビングで雨の音を聞きながら、みのりを待った。
うしろから、カタリと音がする。
振り向くと、バスタオル一枚を体に巻き付けたみのりが立っていた。
「大ちゃん、私を抱いて下さい」
「み、みのりちゃん……！？」
「私を、抱いてほしいの」
真剣な目で大地を見つめるみのり。
バスタオルの端を握る手が、かすかに震えている。

「大ちゃん、あのね。私、今度手術することになったの」
「……え？」

「ここ」

みのりが、自分の胸を指差した。

「私の心臓、あんまり調子がよくなくて、ペースメーカーを入れるんだって」

このあいだ、みのりの父親が言っていた。
ペースメーカーを入れれば、突然心臓が止まるようなことはなくなる。根本的な解決にはならないけれど……。

「赤ちゃんの時も手術したから小さい傷は残っているけど、今度の手術は、結構大きく切るって言ってた。私の胸に、大きな傷が残るの。だから……」

みのりがバスタオルをはらりと下に落とした。
奇麗な白い裸体が、大地の目の前にあらわれる。

「醜（みにく）い傷ができる前に、大ちゃんに抱いてほしいの」
「みのりちゃん！！」

大地はみのりに歩み寄り、彼女の細い体をぎゅっと抱きしめた。

「醜い傷なんてできないよ！みのりちゃんの命を守る、大事な手術

だろ！？ちゃんと治ったら、みのりちゃんがもう嫌だって言うまで抱くから、だから……」

「だめなの。今じゃないと、だめなの。……リスクが、高いんだって」

大地は、言葉をなくした。
彼女の病気は、そんなに重いのか？
病院でも元気だったし、ライブにもよく来ていたし、まさか、そんな……。

「ペースメーカーを入れる手術自体は、そんなに難しいものじゃないの。でも、それは不整脈を治すことはできても、私の心臓そのものを治すことにはならないのよ」

腕の中で震えながら話すみのり。

「手術中に、心臓が止まっちゃうかもしれない。すごく、怖いの。だから、勇気が持てるように……お願い、大ちゃん」

「……わかった」

大地はそれ以上、なにも言葉が出なかった。

【10】誓い

震えながら、大地の腕の中で『抱いてほしい』と懇願する彼女。
この言葉を言うのに、どれだけ勇気が要っただろう。

彼女を抱くことで、心臓に負担がかかってしまうかもしれない。
だから大地は、長く付き合ってきたにも関わらず、みのりの体に触れることはなかった。

でも、そうすることで彼女が勇気を持てるなら。
どっちにしろ、リスクが高いのなら。
彼女の望むことをしてあげたいと思う。

床に落ちたバスタオルを拾い上げ、もう一度その細い体に巻き付けた。
みのりの体を腕に抱きあげ、ゆっくりと二階の寝室へ向かう。

彼女はうつむいて、ただだまって抱かれている。

部屋のドアを開け、シンプルなパイプベッドにその体を横たえた。
奇麗な、きめの細かい白い肌。
その頬は、ほんのりピンクに染まっている。

どこか悪いようにはとても見えない。
１６歳にしては小さいけれど、どう見たって普通の女の子じゃないか。

窓の外では、雨が激しく降っている。
ときどき雷も鳴っているようだ。

大地はベッドサイドに腰かけて、みのりの柔らかな髪を撫でた。

「……抱くよ？」

そう彼女に問いかけたら、小さく「うん」と頷いた。

彼女の小さな胸にうっすらと残っている、小さな傷。

「これがね、赤ちゃんのときの手術の痕。案外残るものなんだね」

体に巻いていたタオルをはずすと、彼女は恥ずかしそうにそう言った。

「もっとひどい傷ができても、大ちゃん、嫌いにならないでね？」
「ならないよ。たとえ傷だらけになっても、みのりちゃんは奇麗だよ」

それは、心からの言葉だった。

こんなに奇麗な魂を、他に知らない。
みのりには一目ぼれだったけど、きっとあのとき、魂が共鳴したんだと思う。

”おまえの魂の片割れはここにいるよ”
神様が、きっとそう教えてくれたんだ。
彼女に出会えた奇跡に、大地は改めて感謝する。

降りやまない雨。
腕の中で体を丸めて眠っている小さな女の子。
その安らかな寝息を聞いて、ホッと安堵する。
手術が必要なほど心臓の悪いみのりを、大地は抱いた。
命がけで、彼女は全てを捧げてくれた。

「泣かないで、大ちゃん」
彼女とひとつになりながら、大地は涙を流していた。
みのりが、そっと涙を指でぬぐってくれ、笑顔を見せる。
「大丈夫。私、生きてる。大ちゃんが、いま証明してくれてるんだよ？」
柔らかな唇で、大地にそっと口づける。
あたたかいその温度に、また涙が出てきた。

「みのりちゃん……愛してる。愛してる。愛してる……」

壊れたレコードのように、「愛してる」と繰り返す。
それ以外の言葉が出てこなかった。

全てが終わったあと、みのりが「ありがとう」と言って泣いた。
ふたりはシーツにくるまって抱きしめあい、ひたすら涙を流した。

今生（こんじょう）の別れではない。
彼女は、手術を終えたらこの腕の中へ戻ってくるんだ。
そう自分に言い聞かせる。

みのりの細い体を抱きしめて、大地は温かな生命のぬくもりを確かめた。

神様……お願いだから、彼女を遠くへ連れていかないでください。

＊＊＊

夕方、みのりは自宅へと帰っていった。

「大ちゃんのおかげで、勇気が出た。もっと大ちゃんと一緒にいたい。もっと大ちゃんの歌が聞きたい。だから、頑張ってくるね」

「うん。俺も、あきらめないで頑張る。みのりちゃんが俺の歌が好きだって言うなら、地球上のどこへ行っても歌うから」

「約束だよ？音楽、やめちゃダメだよ？」

彼女が、バッグから赤いバンダナを取りだした。

「大ちゃん、腕貸して」

大地が左手を差し出すと、それを手首に巻いていく。
そして自分にも同じように巻いてほしいとみのりは言った。

お揃いのバンダナを、今度は大地が彼女の細い手首に結びつける。
すると、みのりがふわりと嬉しそうにほほ笑んだ。

「なんだか、結婚式みたいだね」

お互いの手首に、赤いバンダナを巻き合う。
さながら、結婚式で指輪の交換をしているようだった。

そうだ。
これは俺たちの誓いの儀式。

「みのりちゃん、俺、一生みのりちゃんしか愛さない。だから手術が成功して、お父さん達にも認めてもらえたら、結婚しよう？」

「……いいの？私、欠陥品だよ？」

「そんなこと言わないの。病気だって、みのりちゃんの一部でしょ。個性だって思えばいいじゃん。そういうの全部ひっくるめて、愛し

てるから」

「大ちゃん……」

口元に手をあてて、みのりは大粒の涙を流す。
いままで涙を見せたことがなかった彼女だけど、急に泣き虫になったみたいだ。

「それで、返事は？」
「はい。大ちゃんの、お嫁さんにしてください」
「おう。嫁にしてやる」

ふたりで、額をくっつけてクスクスと笑い合う。

絶対に、この手を離さない。
たとえ、どんな運命が待っていようとも。

【11】3 years later

「今日は最高だったぜー！また会おうなっ！」

ドームツアーも、残すところあと5か所。
今日の東京公演も、最高の盛り上がりだった。

あれから3年。
”Vermilion（バーミリオン）”というバンドはもう存在しない。

ライブハウスでの将棋倒しの事件のあと、そのバンドは姿を消した。
ベース担当でリーダーだった松木は、家の事業を手伝ったあと独立し、今はソフトウェア開発会社の社長をしている。
バンドの契約問題でかなりの違約金を支払ったが、その借金を帳消しにできるほど会社の経営状態は順調のようだ。

そして大地は、3年前の事故の直後、ロサンゼルスに渡る。
最初は言葉や生活習慣で苦労したものの、有力なプロデューサーと出会うことができ、”D”というアーティスト名で音楽活動を続けていた。ビルボードでも上位にランクインしており、向こうではカリスマヴォーカリストとして人気を博していた。

本当は、ずっと向こうで活動を続けるつもりだった。
ロサンゼルスまで大地を訪ねてきた、ある人物に会うまでは。

＊＊＊

「みのりちゃん、ただいま。今日のステージも盛り上がったよ？」
ベッドの上で安らかに眠っている女の子。……いや、もうすぐ２０歳になるから、立派な女性だよな。
顔は相変わらず真っ白で、半袖のパジャマから出た腕は、恐ろしいほど華奢だった。

「果南さん、今日もみのりちゃんは、相変わらず？」
「そうね。早く大地くんに会いたがっていたんだけど、眠気に勝てなかったみたい」
その白い手のひらをギュッと握ると、ピクッと反応する。
無邪気な寝顔に、つい頬がゆるんでしまう。

「じゃ、私は帰るわね」
「ありがとうございました。あの……またツアーに出なきゃいけないんで、その間みのりちゃんをお願いします」
「もちろんよ」

玄関の外では、迎えの車が待っていた。
スモークの窓が開き、顔を出したのはあの松木だ。

「松っちゃん、いつも奥さん借りてしまって、申し訳ない」
「気にすんな。どうせ家にいてもすることないんだから」
「ひどーい！確かにあなたの仕事は手伝えないけど、家のことはちゃんとやってるわよ？」

「ああ、分かってる。悪かったな」

果南が車に乗り込み、テールランプがゆっくりと遠ざかる。

松木と果南は、2年前に結婚した。
ちょうど松木が、独立して自分の会社を立ち上げたときだ。
ロスにいた大地は式には出られなかったが、松木の親族と共通の友人だけの、ひっそりした式だったらしい。

花沢家の親族は、果南の両親しか出席しなかった。
それも、式だけに参列してすぐに帰ってしまったという話だ。
果南は、このとき正式に花沢の家とは縁を切った。
松木とみのりにひどい仕打ちをしてきた花沢一族に対する、ささやかな反抗だったらしい。

大地とみのりは、出会った頃に住んでいたあの一軒家に、今はふたりで住んでいる。
ツアーのとき以外は、この家で曲作りをしたり、レコーディングをしたりしている。
メディア関係には一切出ないので、1年の半分以上はこの家にふたりで引きこもっている形だ。

松木と果南を見送ったあと、家の中に入ろうと玄関の扉を開けた。
すると、玄関先にパジャマ姿のみのりが立っていた。

「ああ、みのりちゃん、起きたの？」
「うん。帰ってきてたなら、起こしてくれたらよかったのに」

「ごめんごめん。みのりちゃんが、あんまり気持ちよさそうに寝ていたから」

ふたりで手をつないで家の中に入る。

「あともう少しで、ツアーも終わるから。だからそれまで、果南さんと一緒にいい子で待ってるんだよ？」

「うん。でも寂しかったから、今日は一緒に寝てね？お兄ちゃん」

＊＊＊

3年前、手術を受けると言って家に帰った彼女は、そのまま行方がわからなくなった。

果南も必死で捜してくれたのだが、手がかりさえつかめなかったようだ。

花沢グループ総帥――――みのりと果南の祖父にあたる人が、彼女を手の届かないところに隠してしまったらしい。

みのりの祖父はものすごくワンマンだったそうだ。

『だったそうだ』というのは、1年前に亡くなったから。

男尊女卑の考えを根強く持っていたその人は、家を繁栄させるものは男子だけで、女子は政略結婚の手駒としか考えていなかった。

体の弱いみのりのことは、花沢の名を語らせるのも嫌悪していたらしい。

同じく孫である果南も、名家の御曹司との縁組をいくつも持ちかけられていたのだが、全て断り教師として自立する道を選んだ。

花沢の女性は、自立心を持った志（こころざし）の強い者が多い。
それも、総帥の神経を逆なでするものだったと果南は言っていた。

そんな花沢の総帥が、ライブハウスでの将棋倒しの事件を知った。
花沢の名を持つ者が、今どきのロックバンドに夢中になり、事故に巻き込まれた。
その怒りは、凄まじいものだったらしい。

実の親であるみのりの父や兄にさえ行方を知らせることもせず、自分の息のかかった病院で手術を受けさせ、その後彼女の身柄を誰の手にも届かないところに隠してしまった。
そんなことも、大財閥の花沢グループの総帥にとっては、朝飯前のことだったのだ。

大地ももちろん、彼女の行方を必死で探した。だが、なんの力も持たない大地には、彼女の居場所を探し出すことなど到底不可能だった。
それどころか、花沢の圧力で日本での音楽活動もできなくなり、大地はロサンゼルスに渡ることになる。

『音楽、やめちゃダメだよ』

あのときの、彼女の言葉を守るために。

そして3年後、総帥が急逝する。
みのりの父親がグループを引き継ぎ、今まで捜索が不可能だった娘の居場所をようやく探し当てた。

そしてある日、身動きが取れないみのりの父親の代わりに、兄である辰己（たつみ）がロサンゼルスの大地のところにやってきたのだ。

「みのりを――――助けてやってくれないだろうか」

ロスでの契約も終了間際だったこともあり、大地はすぐに帰国した。
そして向かった先は、九州の離島の病院。

人口４０００人ほどの小さな島の海沿いに、彼女が入院している病院があった。
病院名のところに『花沢会』とあったから、グループ系列のものなのだろう。
白い外壁の、こぢんまりとした建物。
庭の草花はきれいに手入れされており、暖かい日差しが降り注ぐ。

だが、病院をぐるりと取り囲む、高いフェンス。
そしてオートロックで管理された入口は、まるで牢獄のようだった。

平屋造りの建物の中庭を通って、離れの病棟に案内される。
みのりの兄がインターフォンで何か話すと、カチリとオートロックが外れる音がした。

「みのりは、ここにいる」

辰己が大地に背を向けたまま言った。

そして、意を決したかのようにその扉を開けた。

まるで、小さな女の子の部屋のようなパステル色の壁紙。
サイドボードの上に置かれた、たくさんのぬいぐるみ。
そして、ベッドの上では点滴につながれた女の子が眠っている。

「……みのりちゃん？」

ベッドのそばに歩み寄る。
白い陶器のようななめらかな肌。細い手首。長く、ツヤツヤした黒髪。
そして、長い睫毛にふっくらとした唇。

以前より痩せ細っていたけれど、それは紛れもなく大切な人の姿だった。

「みのりちゃん！！」

ギュッと手を握ってみるが、彼女は目覚めない。

「みのりちゃん……みのりちゃん！！」

何度大きな声で名前を呼んでも、反応がなかった。

（どういうことだよ。彼女に何があったんだ！？）

そのとき、辰己が大地の肩に手を置いてこう言った。

「みのりは、3年前に手術を受けてから、ずっと昏睡状態なんだ」

【12】眠る君のそばで

「……昏睡状態？」

大地は耳を疑った。

信じられない。3年は、かなり長い時間だ。

あれだけ捜しても見つからなかったみのり。

ロサンゼルスに渡ってからも松木や果南と連絡を取り合い、ときには興信所を利用したこともある。

それでも彼女の行方を捜しあてることができず、なかば諦めかけていた状態だった。

そのあいだ、ずっとこの場所で、点滴に繋がれて眠っていたというのか。

「なんで……こんなことになったんですか」

大地は、足元から崩れ落ちそうになりながらも、気力を振り絞って辰己に尋ねた。

みのりの手を握り続ける大地の隣に並び、辰己は妹の額をそっと撫でる。

「手術自体は、成功したんだよ」

そして彼は、静かに話し始めた。

＊＊＊

みのりが大地のもとから自宅に戻った日、屋敷は大騒ぎだったという。
ことごとく言いつけに逆らう孫娘に業を煮やした総帥は、すぐに自分の息のかかった病院に彼女を連れていった。

大地との約束もあり、覚悟を決めていたみのりだったが、大手術を前にパニックを起こしたらしい。
当然のことだろう。命がかかった手術だというのに、身内の者は誰も彼女のそばにいてやらなかったのだから。

「ずいぶん、彼女に酷い仕打ちをするんですね」

低い声で、抗議の意味を含めてそう言った。

「情けない話だ。総帥の力の前に、俺も父親も何も手が出せなかったんだ。血のつながったたった一人の妹を……守ることができなかった」

ようやく彼女を探し出したとき、彼女はいろんな機械に繋がれて、ガラスケースのような病室に入れられていたという。
パニックを起こしたみのりに、病院のスタッフは鎮静剤を使った。
だがそれは、まだ認可の下りていない新薬で、実験的な意味合いも含んでいたらしい。

そして、手術は無事に終了したものの、彼女は目覚めなかった。心拍も安定しているし、脳波も正常だ。なのに覚醒しないというのは、病院としても指示をした花沢の総帥にとっても大問題だった。

だから、彼らはみのりの存在そのものを隠してしまったのだ。

「……これを」

そう言って辰己が差し出したのは、奇麗な模様のお菓子の箱。

「みのりが、手術の前に送ってよこしたんだ。どうしても守りたかった、大事なものだったらしい」

箱を開けると、その中には赤いバンダナと1本のカセットテープが入っていた。

これは……。

ジーンズのポケットに入っているものを取り出す。

だいぶ色あせてしまっているけど、同じ模様の赤いバンダナ。

あのときの誓いの約束を、今でもはっきりと覚えている。

手術が成功して、みんなに認めてもらえたら、結婚しようとふたりで誓った。

指輪の代わりに交わした、お揃いの赤いバンダナ。

約束通り、こうやって迎えに来たんだよ？

「手術が終わったら、結婚しようと約束しました。そんなささやかな彼女の夢を、こんな形で奪ってしまうなんて……」

悔しくて、涙が出る。

どんな思いで、この宝箱を兄のもとに送ったのだろう。

自分がもう戻ってこれないという、悲しい予感があったのだろうか。

「みのりちゃんは、このまま目覚めないんですか？」

答えを聞くのが怖い。

でも、そう尋ねずにはいられなかった。

「いや、目覚める可能性はある。だから君に協力してほしいんだ」

そこには、真剣な眼差しの辰己の姿があった。

＊＊＊

彼の話は、にわかには信じられなかった。

ようやく妹を見つけたはいいが、どんな方法を試してみても、決して目覚めることはなかったらしい。

ところがある日、みのりの宝箱に入っていたテープをウォークマンで聞かせると、3年間目覚めなかった彼女が、ゆっくりと目を開けたのだという。

「信じられなかった。奇跡が起きたと思った。……だが、俺たちの存在に気付いたみのりは、また眠りについてしまった。俺と親父は、

みのりに拒絶されてしまったんだ」

「……辰己さん……」

「だから……頼む。君ならみのりを目覚めさせることができるかもしれない。みのりを……助けてやってくれ」

目の前で眠る彼女。
自分の歌で、目覚めさせることができるのだろうか。
でも、万に一つでも可能性があるなら、それに賭けてみたい。

花沢一族の行為は確かに許せない。
血のつながった家族に、ここまでむごい仕打ちができることが信じられなかった。
けれど、一度会ったみのりの父や今目の前にいる辰己は、彼女を本気で心配しているように思える。

大地は彼を見上げ、力強く頷いた。

「わかりました。やってみます。ただ、もし彼女が目覚めたら、うちに連れ帰ってもいいですか？こんな牢獄みたいな場所に、彼女を閉じこめておけない」

「いいだろう」

辰己は大地に向かって握手の手を差し出した。その手を、力強く握り返す。

「みのりを、よろしく頼む」

「わかりました」

こうして大地は、病院で眠り続けるみのりのために、この島に滞在することになった。

だが、ことはすんなりとは運ばなかった。
ずっと昔、みのりのために作った曲のテープ。
ギターの音だけが録音されたそのテープを何度聞かせても、みのりはなんの反応も示さなかった。

耳もとで、彼女が歌詞を書いた『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』を歌った。
少し……瞼(まぶた)が動いたような気がする。

この歌が、彼女の心の中に届いているのだろうか。
大地は、来る日も来る日も、ベッドの傍らで歌い続けた。

ロサンゼルスでの契約期間はまだ残っていたが、みのりの父がうまく話をつけてくれたようだ。
花沢グループで新しい音楽レーベルを立ち上げ、ロスのエージェントと業務提携したらしい。
そのような形での支援は、正直迷惑だった。
けれど契約トラブルの重大さをよく知っていた大地は、花沢の力に甘えるほかなかった。

メディアには一切出ず、曲だけを作り、リリースする。
ＣＭのタイアップ曲に起用されたりもしたが、謎のアーティストとして、プロフィールは一切公開されていない。

ビジュアルを全面的に押し出していた前の事務所の方針とは違っていて、この点は非常にありがたかった。

ある日、病室にギターを持ち込んで曲作りをしていた大地のもとに、ひとりの少年がやってきた。

「あのさ、お兄さん、もしかして車のＣＭの歌の人？」

「車のＣＭ？」

テレビの類は一切見ていなかったので、最初はなんのことか分からなかった。

だがそういえば、楽曲が車のＣＭに使われると聞いたような気がする。

「もしかしたら、そうかもしれないな。そのＣＭは見たことがないんだけど」

「あのさ、こういう歌でさ」

その少年が、たどたどしい感じで歌ってくれる。

歌詞が微妙に違っていたけど、確かに自分が作った曲だった。

「ああ、それは確かに俺の歌だ。上手だな、おまえ」

「へへへ～」

照れたように笑う少年。

まだ、もじもじしながら病室にとどまっている。

「他にはお兄さんの歌ないの？」

「え？」
「俺さ、あの車のＣＭ好きなんだ。車も好きだけど、歌がかっこよくて！」

少年は、小学校５年生くらいだろうか。
そういえば、自分も音楽に目覚めたのはこれくらいの年だったかもしれない。

「聞きたい？」と聞いたら「うん！」と元気よく答えたので、大地は病室で何曲かギターを弾きながら歌ってみた。
いつの間にか、病室のまわりにはギャラリーがたくさん集まっている。

「ここじゃまずいから、もう少し広いところでやろうか」

病院のスタッフに頼み、中庭にパイプ椅子を並べてもらう。
即席の、ミニライブだ。

何曲かＣＭやドラマに起用された曲を披露してみると、入院中の患者やスタッフが次々と集まってきた。
いつの間にか手拍子が始まり、曲が終わると大きな拍手が沸き起こる。

久しぶりの、オーディエンスとの一体感。
大地はこの日、歌うことが楽しくて仕方なかった。

【13】目覚め

歌が……聞こえる。
のびやかで、力強く……そして、とても懐かしくて愛しい声。

ずっと、暗闇にいた。
何度も現実の世界に呼び戻されそうになったけど、なぜだろう。
現実の光の中に出ていくのが怖くてたまらなかった。

でもある日、優しい音楽が何もない世界に響いてきた。
すごく……懐かしくて、胸が締め付けられる。

私は、その音楽に惹かれる気持ちを止められなくて、思い切って光の世界に飛び出してみた。
でも……そこにいたのは、真っ黒なスーツを着た男の人で。

怖い。
幸せな気持ちから一転、私の心は恐怖でいっぱいになる。

怖い。怖いよ……。

私を、この闇の世界に追いやった男の人たち。黒いスーツ。そして、白衣を着た大勢の医師。
だから私は、再び闇の中へ逃げ込んだ。
あれから何度もあの懐かしい音楽が聞こえてきたけど、私は怖くて、もう外の世界には出ていくことができなかった。

それからどれくらい経ったのだろうか、またあの音楽が響いてくる。
外に出ていかなくても、この音楽を聴いていると気持ちが安らかになれた。
すごく……安心できる。

そしたら今度は、歌声が聞こえてきた。
その声を聞いた途端、私の中でまた新たな感情が生まれた。

愛しくて、切ない。

この声の主の顔が見たかった。
怖い……けど、とても気になる。

歌声が、ふいに止まった。
どうしたのかな？
もっと聴いていたかったけど、声はもう聞こえてこない。

私は、おそるおそる、光の世界に一歩踏み出してみる。
オレンジ色の光の中に、誰かのシルエットが浮かんできた。
よかった、黒いスーツの人じゃない。
赤いチェックのシャツを着て、腕を組んで眠っている男の人。
この人が、あの声の主なんだろうか。

あの声が聞きたい。この人が声の主なのか、確かめたい。
長い睫毛。長い指先。
手首に巻かれた赤いバンダナが、なぜか心に引っかかる。

彼に向って腕を伸ばそうとしてみたけど、力が全然入らなかった。
お願い。目を覚まして？

そのとき、白衣を着た人が部屋の中に入ってきた。
また恐怖がよみがえる。
ベッドの横にいた人の顔を、もっと見つめていたかったけど、私はまた闇の中に戻ることにした。

それから毎日、あの歌声が聞こえてくるようになった。
今がいつで、どれだけの時間が流れているかなんて全然知らない。でも、あの人の声が聞こえるとまた一日が始まったんだなって分かる。
外の世界も、もしかしたら怖くないかもしれない。最近そう思えるようになってきた。

会いたい。
大事な約束をした人が、私を待っている。
誰とどんな約束をしたか思い出せないけど、その大事な何かが私が遠くに行こうとするのを引きとめていた。
確かめたい。それが何か。

今日も、あの人が歌っている。
いつもの懐かしい歌のほかに、初めて聞く曲もたくさんあった。
どれも心に響いて、愛しくて仕方がない。

一瞬、歌が途切れた。
そして遠くから聞こえてくる、あの人の歌声と、大きな拍手。

胸がドキドキする。
会いたい。会いたくて仕方がない。

――――――そして、私は目を開いた。

＊＊＊

「大地くん！」

病院の中庭で即席ライブをしていた大地のもとに、慌てた顔をした病院のスタッフが駆け寄ってきた。
その様子にただならぬものを感じる。

「早く来て！みのりちゃんが……！」

その言葉を聞いた瞬間、大地はギターをその場に置いて病室へと走った。

（目を離すべきじゃなかった。みのりちゃんになにかあったら、俺は……！）

病室に駆け込んだ瞬間目にした光景は、とても信じられるものではなかった。
ベッドの頭の部分が起こされ、眠っていたはずの少女が目を開いてこっちを見ている。
ぐるりと周りを取り囲む、病院のスタッフ。
その中で怯えたように小さくなっていた彼女は、大地の姿を見るなり「あ……」と声を出しながら手を伸ばした。

ずっと寝たきりでいたから、体に力が入らないのだろう。すぐに手がぱたりと落ちてしまう。

大地はゆっくりとベッドに近づくと、その手を柔らかく握った。その途端、彼女が安堵したような微笑みを浮かべる。

「みのりちゃん……」

信じられなかった。

3年間昏睡状態だった彼女。確かに脳波や体の機能にはなんの問題もなく、なぜ目覚めないのかと皆が不思議に思っていた。

この島に来て1カ月。その間も、決して目覚めることのなかった彼女が、なぜこのタイミングで……。

みのりの唇が、微かに動く。

何かを伝えようとしているようだが、うまく声が出せないようだ。

大地は、彼女の唇に耳を寄せた。

「うた……ききたい……」

「……歌？」

そう聞き返すと、小さく頷いた。

（俺の歌……眠っていた彼女にも、届いてた？）

震える声で、いつも歌っていた『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』のワンフレーズを口ずさむ。

それを聞いた瞬間、みのりが嬉しそうに微笑んで再び目を閉じた。

「みのりちゃん！？ダメだ！目を開けて！」

細い体を揺すると、病院のスタッフに慌てて止められた。
「大丈夫、眠っただけだから。みのりちゃん、目覚めたばかりできっと疲れちゃったのね」
明日また、ちゃんと目を開けてくれるのだろうか。
久しぶりに聞いた、彼女の声。胸がぐっと締め付けられる。
「あの……今夜はここに泊まっちゃだめでしょうか。なんか、気になってしまって……」
大地は島にある、病院のすぐそばの民宿で世話になっていた。
起床時間に合わせて病院を訪れ、そして消灯の頃にまた戻っていく。
そんな毎日を送っていた。
けれど、みのりの意識が戻った今、とても彼女と離れて平気でいられる自信がない。
「こちらからもお願いしようと思っていたのよ。みのりちゃん、どうやら病院のスタッフには怯えてしまうみたいで。あなたがそばにいると落ち着くようだから、大地くんさえよければ、みのりちゃんのそばについてあげてほしいの」
「もちろんです！ありがとうございます！」
すやすやと寝息をたてて眠る彼女の手をそっと握る。
そうしたら、無意識だろうか、みのりがキュッと手を握り返した。
今までにない反応に、嬉しくなる。大丈夫。きっとすぐにまた、目覚めてくれる。

みのりと同じ病室に簡易ベッドを運んでもらい、今日はここに泊まることになった。
病室とはいえ、夜に女の子とふたりきりで過ごすのは初めてなので、少し緊張してしまう。

２１歳になった大地は、まだみのり以外の女性を知らない。
ロサンゼルスで音楽の仕事をしていたのだから、もちろんそういう誘いはいくらでもあった。
でも、一種の願かけとでも言おうか。
一瞬でもみのりのことを忘れてしまったら、もう二度と彼女に会えないような気がしていた。

「病人相手に、なに緊張してんだ、俺」

こんな状況で欲情してしまいそうな自分をたしなめる。

簡易ベッドに横になりながら、天井を向いて歌を口ずさんだ。
この声が、彼女にも届いていたんだな。

『大ちゃん、歌って』

彼女はいつもそう言っていた。バンドが解散になり、ギターも歌もどうでもよくなったときも、彼女は『歌をやめないで』と言ってくれた。
だから、今の自分があるのだ。

しばらく歌っていたら、ふいに誰かの声が重なったような気がした。
みのりも歌っているのだろうか。
大地は幸せな気分に浸りながら、暗い部屋のなかで、しばらく歌を口ずさんでいた。

【14】あなたは……誰？

みのりのリハビリが始まった。

３年間も昏睡状態だった彼女は、立つことはおろか、腕さえもあげられない状態だった。
意識がないあいだも看護士が定期的に体の位置を変えていたので、寝たきりだったにも関わらずその他の障害はなかったようだ。
でも、今まで使っていなかった筋肉を動かそうとすることで、毎日かなりの体力と気力を消耗するらしい。

言葉もうまく出てこないみたいだ。
記憶も混とんとしているらしく、誰かが病室に入ってくるたびに、彼女はわけもなく怯えた。

それでも、大地のことはなんとなく覚えているらしく、「あの歌、歌って」とたびたびせがまれた。

みのりのイメージで曲を作り、彼女自身が詞を書いてくれた『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』。
バンドの解散のとき、デビュー曲の著作権はレコード会社に渡ったが、この曲だけは手放さなかった。

活動の拠点をロサンゼルスに移してからも、彼女以外の人のために、この歌を歌う気にはなれなかった。
世間では、『幻の名曲』と言われているらしい。

『僕たちは、めぐりあうために生まれてきた――――――』

歌詞は全て英語だったから、デビュー当時は意味も分からず歌っていたこの曲。
ロサンゼルスに渡り、だんだん言葉の意味が理解できるようになると、今度はこの歌に込められた彼女の想いが切なくて。

『泣かないで　たとえ君が僕のことを忘れてしまったとしても、僕の魂はいつも君のそばにある――――――』

自分の運命を受け入れていたかのようなその言葉に、ぎゅっと胸が締めつけられる。
君のことを、忘れられるわけがない。俺の魂だって、君のもとにあるんだから。

１６歳の彼女は、どんな想いでこの詞を書いてくれたのだろう。
病室のベッドで、ヘッドフォンでギターの音を聞きながら。

カセットテープと一緒に大切にしまってあった、あの約束のバンダナ。
俺だって、あの日の約束を忘れたことなんてなかったよ？
色あせたそれを、いつも身につけていたんだから。

君が望むなら、いつだって、いくらだって歌ってあげる。
彼女が、戻ってきてくれてよかった。
このまま君を引きとめておけるなら、声がかれるまで歌うから。

だからもう、目の前から消えたりしないで。

リハビリが終わって、疲れたみのりは静かに眠りについている。大地は、彼女が再び目覚めなくなったら……という恐怖で、そのままそばを離れることができないでいた。

＊＊＊

「あなたはだれ？」

リハビリも順調に進み、ひとりでベッドから起き上がれるようになったみのり。

もともと体の機能にはなんの異状もみられなかった彼女は、みるまに回復していった。

記憶は相変わらず混沌としているみたいだが、なんとなく、いろんなことを思い出してきたみたいだ。

「俺は、峰屋敷大地。病院の院内学級で出会ったんだよ？えっと……みのりちゃんは、俺に『家族になって』って言ったんだけど、覚えてない？」

恋人だった……というのが照れくさく、大地はそんなことを言った。

「あなたは家族なの？そういえば『大地の妹』って言われてた気がする。あなたは……私のお兄ちゃん？」
「え？」
「お兄ちゃん」

無邪気に笑うその姿を見て、大地はそれ以上何も言えなかった。
今は混乱しているけど、きっと記憶も戻ってくる。
それまで、彼女の兄を演じてあげてもいいかもしれない。

病院の先生も、それがいいと言ってくれた。
混乱させるのはかえって逆効果だから、彼女に合わせてあげてほしいと。
いずれ、記憶は戻ってくるからと。

大地は、彼女がすぐに元に戻ると高をくくっていた。
だが、ものごとはそう簡単には進まなかった。

＊＊＊

「大地にーちゃん、いる？」

ある日みのりの病室に、元気な男の子が入ってきた。
誰だろう。初めて見る顔だ。

「あれ？ねーちゃん目が覚めたんだ。俺がこの病院に来てからもずっと寝てたみたいだから、心配してたんだぜ？」

その男の子は、へへっと笑いながらベッドのそばに寄ってきた。
日に焼けた、健康そうな肌。この子もどこか悪いのだろうか。

「あなたは、大ちゃんの知り合い？」
「うん。俺は一之瀬　幹。大地にーちゃんとは友達なんだ」
「君も、どこか悪いの？」
「ううん。弟の草がこの病院に入院してるんだ。喘息が酷くて、しばらく療養してる」
「ふーん」

幹は、とても人懐っこい子供だった。
初対面の人と話すのが苦手なみのりも、この子とはすぐに打ち解けられた。

この少年は、弟の入院に付き添いながら、島の小学校に通っているという。
この病院には子供はひとりしか入院していないから、学校が終わるとすぐにここへ戻ってきて、弟の相手をしているらしい。

遊びたいざかりのはずなのに、病院と学校を往復する毎日。
この子の親御さんは、どうしているんだろう。

「幹くんのお父さんとお母さんは？」

そう聞くと、幹はなんでもないようにこう言った。

「どっちもいないよ？父さんはずっと前に死んだ。母さんは弟の入院費を稼ぐために本島で働いていたけど、去年死んだんだ」
「そっか……。大変だったね」

両親のいない子供……。そういえば、自分もそうじゃなかっただろうか。

「私もね、両親がいないの。北海道で牧場をやっていたんだけど、事故で亡くなってね。今はお兄ちゃんとふたりきりなの」

「お兄ちゃん？」

「うん。大地お兄ちゃん」

幹が不思議そうな顔をした。なんだろう。変なことを言っただろうか。

そのとき、病室に誰かが入ってきた。

「なんだ幹くん、君も来てたのか」

「あ、こんにちは」

幹がその人に向かって、ぺこりと頭を下げた。

誰？幹くんの知り合い？

みのりは病室に入ってきたその人物のほうを見た。

黒いスーツを着た、男の人。

途端に、忘れていた恐怖がよみがえる。

嫌だ。この人は、私をどこかへ連れて行こうとする。

＊＊＊

「キャー！！」

みのりの病室のほうから悲鳴が聞こえてきた。

大地は、彼女の入院に必要なものを買い出しに、町のほうまで行っていた。
最近は症状も落ち着いているし、少しのあいだ離れていても問題はなかったので安心していた矢先のことだった。

「みのりちゃん！？」

廊下の突き当たりにある彼女の部屋へと走った。
異変に気付いた病院のスタッフも、病室へと入っていく。

「いやだっ！離してぇぇ！」

医師が、ちょうどみのりに鎮静剤を注射するところだった。
ダメだ！彼女は注射されるのを極端に嫌う。

「待ってください！」

スタッフをかき分けて、みのりのベッドにたどり着く。
大地の姿を見つけた彼女は、パニックになりながらしがみついてきた。

「みのりちゃん、もう大丈夫だよ？何があったの？」

そう優しく問いかけても、彼女は怯えて震えるばかりだった。

「あのさ、俺が来たときは普通だったんだよ？学校の話とか、いろんなことをねーちゃんが聞いてくれてさ。ただ、あの人が来たら、ねーちゃん、こんなふうになって……」

そう言ったのは、病院で仲良くなった少年だった。
青ざめた顔をして、スタッフの間に立っている。

「あの人？」

誰だ？誰か来たのか？

すると幹は、病室の入り口付近を指差した。
大地がその方向を見ると、そこには以前見たことがある人物が立っていた。

「花沢さん……」

そこに立っていたのは、花沢グループの現総帥。みのりの父親だった。

【15】家に帰ろう

「あの……これよかったら」

談話室のテーブルにコーヒーの入った紙コップを置く。

「すまないね」

目の前に座っている人物が、その安っぽいコーヒーを手に取った。みのりの父親の花沢氏に会ったのは、3年前の一度きりだ。自分たちがデビューする前、彼女の病院で会った、あのときだけ。

そのときも、全然自分の娘に会いに来ない彼女の父や兄の存在に違和感を感じていた。

大地がこの病院に来てからも、一度もこの人は見舞いにきていない。兄である辰己は何度かみのりが目覚める前に見舞いに来ていたけど、父親は全く来なかった。

「正直……あれほどの拒絶を受けるとは思っていなかった」

肩を落としながら、花沢氏が自嘲気味に笑う。

「どうも白衣を着た人やスーツを着た人が苦手みたいで……」

フォローになっているか分からなかったが、一応『あなただけじゃない』というニュアンスでそう言ってみた。

花沢氏がコーヒーをひとくち啜(すす)り、「不味いな」とつぶやく。

「まぁ、病院の自販機で買ったインスタントですからね。慣れれば平気ですよ？」

そんな大地の言葉に、花沢氏は初めての笑顔を見せる。

「君には、本当に世話になった。本来は、みのりのことは私たちがなんとかしなければいけないことだった。だが……長年避けてしまっていた娘に、正直どう接していいか分からなくてね」

「どうしてあなたたちは、そんなに彼女に冷たく当たるんですか？」

長年疑問に思っていたことを、大地は口にした。

たったひとりで孤独に病魔と闘ってきた少女。彼らがもう少し彼女に愛情を注いでいれば、きっとこんな事態にはならなかったはずだ。

「私の父……先日亡くなった前総帥は、みのりを嫌悪していた。いや……正確にはみのりではなく、私の妻、みのりの母親のことをね」

「みのりちゃんのお母さん？」

「ああ。みのりの母親は一般家庭の人でね。周囲の反対を押し切って、駆け落ち同然で結婚したんだ。自分には、当時親が決めた婚約者がいたにも関わらずにね」

大財閥の跡取り息子。その彼が親の決めた婚約者ではなく、一般家庭の女性を選んだ。

それだけで、みのりの母親に対する周囲の目がどんなだったか、安易に想像できる。

「将来跡取りとなる長男を産んだことで、一度は妻に対する周りの態度も軟化されたように思えた。だが、次に生まれたみのりが生ま

れつき心臓が弱かったせいで、妻は遺伝子的に欠陥があるのではないかとふたたび責められるようになったんだ」

『おじいちゃんが”こんな欠陥品、どこにも嫁に出せない”って私のお母さんをものすごく責めたんだって。だからお母さんは、私がまだ小さい頃、花沢の家を出て行っちゃった』

みのりがかつて言っていた言葉を思い出す。周囲の迫害に耐えられず、彼女のお母さんは出ていってしまった。まだ小さかった娘を残して。

「自分が海外出張に行っているあいだに、妻は消えていた。使用人からの話によると、長男と娘を連れて出ていこうとしたらしい。だが屋敷を出ていく寸前、総帥に見つかり、子供たちは取り上げられて妻はたったひとりで追い出されたんだ」

「そう……だったんですか……」

全ての人の運命が、前総帥――みのりの祖父によって狂わされたんだ。

既に亡くなった人ではあるが、大地はその話を聞いて怒りに震えた。

「でも、それがみのりちゃんを避ける理由にはならないですよね？母親の代わりに、父親であるあなたが彼女に愛情を注ぐべきだった。俺が彼女に出会ったとき、本当に孤独で……それなのに笑顔を振りまいていている彼女を見て、自分がそばにいてやらなきゃと思ったんです」

「本当に、その件に関しては自分には何も言う権利はない。みのりには何の罪もない。だが、みのりの病気のせいで妻が出ていったと

思うと、とても娘に会う気にはなれなかったんだ。事業家としては一流かもしれないが、父親としては最低だ」

この人も、心の中ではきっと彼女を大事に思っているのだと思う。でなければ、自分の目の前で、こんな無力な姿をさらしたりしないだろう。

ただ、不器用で……ストレートな愛情を、彼女に示す方法が分からなかっただけかもしれない。

「みのりちゃん、まだ記憶が混乱していて、俺のことを兄だと思っているらしいんです。最初はショックでしたけど、少しずつ記憶を取り戻していけばいいなって今は気長に構えています」

「本当に……私のことも、許してくれたらいいが」

「大丈夫ですよ、家族なんですから。ただ、今度来るときは、スーツじゃなくて普段着のほうがいいと思います」

「わかった。心得ておくよ」

みのりの父の表情が、少し柔らかくなった。

「そうだ、それから……」

思い出したように花沢氏が話を切り出した。

「さっき病室にいた幹くんなんだが、妻の再婚相手の連れ子なんだ。そしてその弟の草くんは、その再婚相手との間に生まれた子だ。だ

からあの子たちは、みのりの弟にあたる」

「ええ！？」

あの幹くんと草くんが……みのりちゃんの弟！？

「父が亡くなったあと、私は元妻のことも捜したんだ。探し出したときにはすでに元妻もその再婚相手も亡くなっていたがね。あの子たちをいずれ養子に迎えるつもりだよ」

「みのりちゃんも、きっと家族が増えて喜びます」

大地は、笑顔でそう答えた。

みのりちゃん。君があんなに欲しがっていた家族が、こんなに増えたよ。

早く……帰ろうな。俺たちの、あの家に。

＊＊＊

そして、さらに1か月が経過した。

リハビリも順調に進み、みのりはついに退院できることになった。

かねてからの約束通り、大地はみのりを東京にある自分の家へ連れて帰ることにした。

あの家――――かつて、松木とともに暮らしていた郊外の一軒家に。

松木の両親が大地の留守のあいだもきちんと管理してくれ、全てあのときのままらしい。

「嬉しい！あの煉瓦のおうちに帰れるんだね！」

煉瓦の家。確かにそうだ。でも、みのりにとっての帰る場所があの家ということに、どこか違和感を感じる。

そういえば、彼女は少しずつ記憶を取り戻しているようだが、本当の家族――――花沢家のことは、一切口にしなかった。

故意なのか。それとも、思い出したくない何かがあるのだろうか。

病院を去る日、スタッフや患者が総出で見送ってくれた。

幹と草にも別れを告げる。

「大地にーちゃん！音楽番組に出たら、『幹～見てるか～』って言ってね！」

「はは。音楽番組に出るか分からないけど、もしそのときは言ってやるよ」

草の病状も快方に向かっているので、退院も間近のようだ。

この兄弟を養子にすると言っていた花沢氏。

両親のいないこの子たちにとってはいいことかもしれないが、みのりが寂しい思いをしてきたあの家で、果たして彼らは幸せになれるのだろうか。

――――いや、全ての元凶であったみのりの祖父はもういない。

きっと、全てうまく運ぶだろう。

大地とみのりは九州の離島の病院に別れを告げ、新たなる一歩を踏み出した。

【15】家に帰ろう（後書き）

『ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧ』２章終了です。拍手御礼小説『大地のラブソング』として掲載していたのもここまでなので、次章からは書き下ろしとなります。東京に戻ったふたりのその後のお話を、お楽しみに（＾＾♪

※拍手ボタンを設置しました♪ポチッとしていただけると励みになりますので、気に入っていただけたらポチッとお願いします！（自分で描いたイラストが飛び出しますので、作品のイメージを大切にしたい人はパスしてくださいねー！）

【16】ふたりの思い出（前書き）

みのり視点。

【16】ふたりの思い出

「ただいまー」

玄関を開けるなり、大地は出迎えたみのりを抱きしめた。
ライブが終わると、大地は気力と体力を使い果たし、ボロボロになって帰ってくる。
今回のライブツアーは、東京を含めて全国で１０か所。
１つの会場で２～３回、日を分けて公演するので、全国ツアーとなると３か月に渡る長丁場だ。

移動のときは必ず家に立ち寄り、みのりの無事を確かめる大地。
みのりはそんな大地の帰りをひたすら待ち、帰ってくるとそれまでの寂しさをお互いに埋め合う。

「どうしてあんなにボロボロになるまで頑張るんだろう」

大地が留守のあいだ一緒にいてくれる果南に、みのりはそう聞いたことがある。
これまでと同様にメディア関係に出ることは滅多にないが、大地は精力的にツアーを行っていた。

家では穏やかに曲を作ったり、みのりとともにのんびりした時間を過ごしている大地。
ところがツアーが始まると、とたんに顔つきが変わる。
みのりの前ではいつものように優しい笑顔を見せるのだが、地下の防音室で何時間もギターを弾いてみたり、ときには曲をいくつも描き散らしたりもする。

普段とは違う大地の姿を見て、みのりは正直戸惑いを隠せないでいた。

「祐輔が言うには、ライブのときの大地くんは神がかっているって。決して頑張っているわけじゃないみたいよ？」

そうなのだ。ボロボロになって帰ってくるのだが、大地の顔は輝いている。
そして、そんな彼の姿を見てドキドキしてしまう自分に、さらに戸惑ってしまうのだ。

入院中、ずっと彼を兄だと思っていた。けれど東京に来てから、果南が彼は兄ではないと教えてくれた。
なんとなく、自分でもいろんなことを少しずつ思い出す。
そういえば『大地の妹』と呼ばれていたけれど、本当に妹なわけではなかったような気がする。

じゃぁ、自分の本当の家族はどこだろう。
それを思い出そうとすると、突然心を暗闇が支配する。
思い出せない……いや、思い出したくない。
自分の心の奥底が、そのことを考えるのを拒否していた。

シャワーを浴びて、みのりのベッドに潜りこんでくる大地。
ライブで疲れ果てた彼は、あっというまに寝入ってしまう。

少し前まで、明るい色だった髪の毛。

柔らかなその髪を見て私が『ヒヨコみたい』と言ったら、次の日髪の毛を黒く染めてきた。
しっかりしているけど、意外と子供っぽいところもある。
別に、悪い意味で言ったんじゃないんだけど、傷ついたのかな？

となりで眠る大地の髪を撫でる。まだ少ししっとりしていて、いい匂いがした。睫毛が長くて、肌もすべすべしている。

「かわいい顔……」

そう言ったら、大地は寝ぼけたままみのりの胸に顔をうずめてきた。
一瞬びっくりするけれど、そんな大地の頭をみのりは撫で続ける。
どうやら大地は、みのりの心臓の音を聞くと安心するらしいのだ。

「赤ちゃんみたい」

クスリと笑いがこみ上げる。
赤ちゃんって、お母さんの心臓の音を聞くと安心して眠るって聞いたことがある。今の大地は赤ちゃんそのものだ。

大地の柔らかな髪に触れていると、みのりの胸は愛しさでいっぱいになる。
本当の兄ではないのに、まるで兄妹のように接してくれるこの人のことを、過去の私はどう思っていたんだろう。
まだ記憶は混とんとしているけど、きっと彼のことが大切で仕方なかったような気がする。

「好き……だったのかな」

声に出してみて、ドキッとする。

眠っているあいだ、彼の声がずっと私を呼んでいたような気がする。

3年間、私は昏睡状態だったと聞いた。そのあいだ、自分が何を考えていたかなんて、もちろん思い出せない。

でも、この声に導かれて私は現実の世界へ戻ってくることができた。

『彼との約束がある』という言葉が、何度も頭の中をよぎっていた。

約束を交わした”彼”というのは、目の前で眠るこの人なのだろうか。

ものすごく大事なことなのに、思い出せない自分がもどかしい。

彼にふたりの関係を何度か聞いたことがあるけど、そのたびに彼は困ったような笑顔を見せるだけだった。

どうやら、私が自分で記憶を取り戻すまで待っていてくれてるらしい。

赤の他人……とも少し違う気がするけど、どうして彼が私の兄のふりを続けてくれるのか、みのりには理解できないでいた。

いや、本当は何となくその理由が分かる。

今の自分だって、同じではないか。

兄妹ではないと気付いているのに、大地にそれを言いだせないでいる。

それを言ってしまったら……彼のそばにいられなくなるような気が

したから。
本当の家族ではないけれど、自分の帰る場所はここだよって、ハートが教えてくれていた。

すやすやと寝息をたてる大地の頬に、みのりはそっと手を触れた。大地はいつもぎゅっと抱きしめてくれるが、決してそれ以上のことはしてこない。
思い出せないことがいくつもあるけれど、今のこの関係はみのりにとって心地のよいものだった。

まだ……記憶に蓋をしておいてもいいだろうか。彼は、それを許してくれるだろうか。
できれば、このままこの人と一緒に穏やかな時間を過ごしていきたい。

＊＊＊

「みのりちゃん、明日のライブでツアーは最後だから。そしたらゆっくり温泉にでも行こうぜー」

ツアーのラストの会場は、横浜アリーナ。当初は5大ドームだけの予定だったが、ライブのチケットが一瞬でソールドアウトするほどの人気ぶりに、急きょアリーナ会場での追加公演も決まったのだ。今回の会場が近場だということもあって、3日間の公演だが大地は毎日自宅に戻っていた。

「みのりちゃんの顔を見ると、ほっとする」

そう言って帰ってくるなりみのりをぎゅっと抱きしめる大地。

みのりにとっても、そんな大地の笑顔を見ることが何よりも嬉しかった。

「でも、温泉はいやだなー」
「なんで？」
「だって、傷があるから……」

みのりの胸には、傷がある。
記憶を失っているあいだに、ペースメーカーを埋める手術をしたらしい。
でも、それは思ったよりも大きな傷で、３年経った今でもくっきりと痕が残っている。

「なんだ。そんなこと気にしてんの？」
「え？」
「別に、貸し切り風呂に入ればいいじゃん。それとも、俺と一緒に混浴に入る？」
「や、やだ！大ちゃんのエッチー！」

ポカポカと殴るふりをしたら、大地が笑いながらその拳を受け止めた。
そして笑い声が途切れると、少し切なそうな表情を見せる。

「前も、こうやってみのりちゃんに怒られた」
「え？」
「俺がみのりちゃんをからかってさ。で、殴られそうになった」
「……」

ふたりの、大事な思い出。やっぱり彼は、思い出してほしいんだよね。
私だって思い出したい。でも、思い出すのが怖い。

「ごめん……」

そう言ってうつむくと、大地がその大きな手のひらでみのりの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「俺を殴ったこと？いいよ、そんなの気にしなくて」
「そうじゃなくて！」

みのりが大地を見上げてそう言うと、彼はニコッと優しい笑みを浮かべた。

「別に、今すぐ思い出さなくてもいいじゃん。のんびりいこうぜ。俺って北海道で生まれ育ったから、気が長いんだよねー」

「北海道の人って、そうなの？」

「だって、冬がやたら長いじゃん。そのあいだほとんど家から出ないで、春が来るのをじっと待ってんだぜ？……俺はじっとはしてなかったけどさ」

そう言って彼は、いたずらっぽく笑った。

大地の笑顔に、救われる。なんて心の大きな人なんだろう。
彼のそばにいるだけで、気持ちがほっこりしてくる。
やっぱりこの人は、自分にとってかけがえのない人なんだ。

「早く、みのりちゃんを北海道に連れていきたいよ」

大地はそう言って、もう一度みのりをそっと抱きしめた。

【17】LIVE（1）　side－みのり

「ねー大ちゃん、どうしてもダメ？」
「どうしてもダメ！」

ツアーの最終日。会場は横浜なので、ここからは電車ですぐの距離だ。
果南がライブのチケットが手に入りそうだと言うので、みのりは大地の歌声を間近で聞いてみたいと願い出た。
ところが大地は「ダメ」の一点張り。

「みのりちゃんの心臓にはペースメーカーが入ってるんだからね！？何かあったらどうすんだよ！」

大地が心配しているのは、やはりみのりの体のことだった。日常生活を送るうえではさほど問題はないのだが、やはりライブ会場となると何が起きるか分からない。
いろんな機材が、ペースメーカーに悪影響を及ぼすかもしれない。
それに、もし人にぶつかったりして衝撃を与えたら……。

「今日で終わりだから。そしたら飽きるほど歌ってあげるよ。みのりちゃんのためだけにね」
「ぶー」

むくれるみのりの額を小突いて、大地は「行ってきます！」と玄関を出ていった。

「もう！完全に子供扱いなんだから！」

ぷりぷりしながらリビングに向かうと、留守番に来てくれた果南がクスクスと笑いながら待っていた。

「果南ちゃん、やっぱりダメだってー」

「仕方ないよ。大地くん、みのりちゃんのことが心配でたまらないんだもの」

「せっかく大ちゃんのライブが見られると思ったのにー」

すると果南が、ゴソゴソと紙袋から何かを取り出した。

「じゃーん！」

「なにそれ？」

「大地くんのライブのＤＶＤで～す！」

果南が持ってきてくれたのは、数枚のＤＶＤだった。果南の夫である松木祐輔は、かつて大地と一緒にバンドを組んでいた。インディーズ時代から松木らと懇意にしていた果南は、彼らのライブを撮影していたらしい。

「インターネットにも投稿されていない、激レア映像よ～♪」

「ほんとー！？」

さっきまでの不機嫌さはどこへやら。みのりは果南の土産に大喜びだ。

デビュー当時の映像や、ロサンゼルスで音楽活動をしていたときのプロモーションビデオがあるはずなのに、大地は恥ずかしがってそれらをみのりに見せたがらない。

だからみのりにとって、大地のライブ映像を見るのはこれが初めて

だった。

５５インチの大型テレビのスイッチを入れ、果南が持ってきたＤＶＤをデッキに入れる。
数年前のカメラの映像だったが、とてもきれいに映っていた。

激しいドラムとベースが作りだすリズム。このベーシストが果南の夫の祐輔だ。
そして、その隣でギターを弾いているのが大地だろうか。
今も童顔だが、その映像の彼はさらに幼く見えた。
スラッとした体。背も今ほど高くない。

「これは、大地くんがまだ高校生だったときね。祐輔がやっていたバンドに入ってすぐくらいかしら」

一生懸命ギターを弾く大地は、とても楽しそうだった。
そして大地が歌いだした瞬間、みのりは心臓が高鳴るのを感じた。

「すごい……」

少年のようなあどけない姿からは想像できないくらいの、パワフルな歌声。
縦横無尽にステージを走り回っているのにその呼吸は乱れず、叫ぶように歌い続ける。
家でもよく歌っているけど、ステージの上の大地は全く違っていた。
熱いオーラがほとばしっている。
みのりの目は、大地の姿に釘づけだった。

「みのりちゃん？」

果南の声にはっとする。

みのりは、知らず知らずのうちに涙を流していた。

「ごめんなさい……。大ちゃんの歌を聞いたら、なんか涙が出てきて」

閉ざされた記憶のどこかが、大地の歌声に反応している。

「何か、思い出した？」

「……ううん」

懐かしいという感情は浮かんでくるのだが、それ以上のことは思い出せない。

きっと果南ももどかしく思っているだろう。

「果南ちゃんのことは、なんとなく思い出せたの。小さい頃からよく遊んでくれたお姉さんなんだよね？」

小さい頃の幸せな映像が、果南といると脳裏に浮かんでくる。

こうして一緒にいるとホッとできる存在。

たぶん果南も、大地とは違った意味でのみのりにとっての大事な人だったのだろう。

「でもね、頭の中に真っ黒な部分があって、大ちゃんとの思い出はそこに閉じこめられているの。大事なことだから思い出したいんだけど、思いだそうとすると怖くなっちゃって……」

絞り出すようにそう告げると、果南がみのりをそっと抱きしめた。
「無理に思い出さなくてもいいよ。私も花沢を捨てた人間だから、みのりちゃんの気持ちがなんとなく分かる。大地くんも、ゆっくりでいいって言ってくれてるんでしょ？」
「うん……」

大地も、口では「ゆっくりでいい」って言ってくれる。
でも、時おり見せるその切なげな表情が、『俺を早く思い出して』って私に訴えかけてくるのだ。

「ねぇ、果南ちゃん。大ちゃんのライブ、見に行っちゃダメかな」
「え？」
「実際に目の前で大ちゃんの歌を聞いたら、何か思い出せそうな気がするの」

彼のことを、思い出したい。記憶を失う前の気持ちを、取り戻したい。
その鍵を、大地の歌が握っているような気がする。

「でも……」
「お願い！絶対に迷惑かけないって約束するから！自分の体のことを、一番に考えるから……」

すると果南が困ったような顔をしながら、大きなため息をついた。
「昔から、みのりちゃんの”お願い”には逆らえないのよねぇ……」
「果南ちゃん、ありがとう！大好き！」

みのりは、苦笑する果南の首にしがみついた。

＊＊＊

「おお！！大地の妹！」
「こ、こんにちは……」

会場の裏口から出迎えてくれたのは、髪の毛がウェーブがかった、ガタイのいい男の人だった。
その人はみのりの顔を見てニカッと笑うと、松木と果南にこう言った。

「松っちゃん、大地の妹、ほんとに見つかったんだなー」
「ああ。アツシにも迷惑かけた」

イベントスタッフをしているアツシという人物は、どうやら松木の知り合いらしい。
みのりのことを『大地の妹』と呼ぶってことは、過去の自分のことも知っているのだろう。

「あ、あの……なんで私のこと”大地の妹”って……」
「え？ああー」

アツシが意味深に笑う。「言ってもいいのか？」と松木に了解をとったあと、アツシはみのりに向かって話し始めた。

「いやー、いっつもライブに場違いな格好の子が来ててさ……ってアンタのことなんだけど。けっこう可愛いからナンパしようとしたら、大地が真っ赤になって怒ってよー。『妹だから手を出すなっ』って俺に言ってさ。あいつひとりっ子なのに妹なんてバレバレな嘘

ついて、いやーおもしろかったぜ？」

当時の様子を思い出したのか、アツシがゲラゲラと笑う。

『大地の妹』っていうフレーズがやたら頭に残っていたけれど、実際に自分はそう呼ばれていたらしい。

記憶の曖昧さがとても不安だったが、その中に真実もあったのだと少しホッとする。

するとアツシが、笑うのをやめて真面目な顔でみのりを見た。

「アンタがいなくなって……大地は抜け殻のようだった。それでもあいつには音楽があったから、なんとかやってこれたんだ。戻ってきてくれて、ありがとな。今のあいつは、鳥肌が立つほどすごいぜ？」

アツシの目が、キラキラと輝いている。なんだかこの人のこんな表情も、私の記憶のどこかに残っているような気がする。

松木の顔も、生き生きしていた。

そんな様子を見て、なぜだか自分の気持ちも高まってきた。

「大ちゃんのライブ、すっごく楽しみ！」

「だろー！？特等席を用意してやったぜ！」

”ＳＴＡＦＦ”と書かれたネームプレートを手渡され、それを首にかけて裏口から会場に入る。

狭い通路を通り、アツシが連れていってくれたのは、ステージの正面のボックス席。

「アツシくん、こんなＶＩＰ席、入っちゃっていいの？」
「ああ。ここはスポンサーの席なんだけどさ、いっつも来ないんだぜ？もったいねーじゃん」
「スポンサー？」
「なんつったっけかなー。ああ、花沢グループ会長？」

その言葉を聞いた途端、みのりの心臓がドクンと大きな音をたてた。
なんだろう……その名前は、私の心に闇を落とす。

みのりは大地のライブへの期待に膨らむ半面、言い知れぬ不安を感じていた。

【18】ＬＩＶＥ（２）　ｓｉｄｅ－大地

ライブツアーも、今日が最終日だ。

３年前、日本の音楽業界から追われた大地。
そんな自分を、今度は手のひらを返したように、アメリカで成功し凱旋帰国したアーティストとして扱うメディア。
少し前の自分だったら、そんな連中にいいように使われるのは我慢できなかっただろう。

でも、今の大地は違った。
とにかく歌うことが楽しいのだ。

ロサンゼルスでの自分は、みのりがいないという現実を忘れるために、がむしゃらに歌ってきたような気がする。
ひたすら曲を作り、ライブで歌い、くたくたにならないと眠れなかった。

それが変わったのは、みのりに再会してからだ。
自分の歌で目を覚ました彼女。その事実が、大地の心に変化をもたらしていた。

音楽には、パワーがある。

病室でみのりに付き添っていたときは、みのりのことと、音楽が全てだった。
ただひたすら、彼女のためだけにベッドの傍らで歌い続けた自分。

音楽と、こんなに時間をかけて正面から向き合ったことが、今まであっただろうか。

歌が――――音楽が好きだと、改めて思えた。

そんな気持ちを、会場に来てくれるみんなにも伝えたい。
だから、今回のツアーは大地にとって大切なものだった。

（本当は、みのりちゃんにも聞いてほしかったんだけど……やっぱり体のことが心配だし）

今の自分を見てほしいのは、誰でもない、みのりだ。
何か思い出すかもしれないという打算的な思いもあったのだが、それよりも『音楽をやめないで』という彼女の言葉のおかげで今の自分があるんだってことを、彼女に教えてあげたかった。

いつかまた……彼女に自分のステージを見せられる日がくるのだろうか。

「Ｉｔ' ｓ　ａｂｏｕｔ　ｔｉｍｅ，　Ｄａｉｃｈｉ．（そろそろ時間だ、大地）」

今回のツアーのためにロサンゼルスから来てくれた、かつてのサポートメンバー。
松木たちとバンドを組んでいたときのようなワクワクするような高揚感はないが、今まで自分を支えてきてくれた大事な仲間だ。

「Ｏ．Ｋ．　Ｈｅｒｅ　ｗｅ　ｇｏ！（オーケー。いくぞ！）」

円陣を組み、メンバー全員で気合いを入れる。
満員の客席からは、詰めかけたファンの歓声が聞こえてくる。
いつだってこの瞬間は最高に緊張するが、その緊張感が心地いい。

会場の照明が消え、ステージ上に轟音を響かせながら火柱が上がった。
サポートメンバーは先にステージに立ち、それぞれの音をオーディエンスに聞かせている。

その音が静かにフェードアウトし、最新のアルバムに入っている曲の前奏が流れ始めた。
スローなイントロから一転、激しいドラムとギターがアップテンポの曲を奏でる。
いよいよ出番だ！

「いくぜ――――！！ＹＯＫＯＨＡＭＡ――――！！」

そう叫びながらステージに飛びだした。

ギラつくライトと両サイドのスピーカーから飛び出す爆音。
それに劣らない、客席からの大歓声。

大地は、ステージの端から端まで駆け巡りながら歌う。
会場のライトは自分に向けられているから、客席の様子は目には見えない。
だが、この溢れるほどの熱気が、大地の感情をさらに煽っていた。

ステージの上では、何も考えられない。ただ、会場の熱を感じ、自分の全てを客席に向かってぶつける。
この特別な空間を共有している人たちと、音楽を楽しむだけだ。

そして1時間ほど経過した頃、ひと息ついてMCタイムが始まる。
相変わらず大地はMCが苦手だった。
ロサンゼルスにいた頃は、英語が下手だからといって他のサポートメンバーに任せっぱなしだったが、今回はそうもいかない。
大地は覚悟を決めてマイクを持ち、静かに話し始めた。

「ええと……みなさん、お久しぶりです」

どっと観客席に笑いが起こる。
MCのときには敬語になってしまう大地。自分では面白くもなんともなかったが、そういえばみのりもやたらウケていたっけ。
ライブ中の照明はステージの上だけに当てられるが、MCのときは会場のみんなが見たいから、客席のライトもつけてもらうことにしている。
大地は歌を聞きにきてくれたファンの顔を見渡し、ロサンゼルスでの活動のことや、日本に帰ってきてからの曲作りのことなどを話した。

そのとき、ふと大地の目に正面のボックス席が映る。
扉を開けてバルコニーに出てきたのは、松木とアツシだろうか。
（アツシがイベント会社に就職してたのはびっくりだったなー。似

合ってるけど）

アツシと再会したときのことを思い出し、苦笑する。
今回のツアーの主催会社にいたアツシは、大地の顔を見るなり号泣した。

「おまっ！日本に戻ってきてたんなら、連絡くらいしろよー！」

そう言って大地に向かって怒鳴ったアツシ。そういえば、絡み癖はあったけど、松木とともにいつも大地を心配してくれた兄貴のような存在だった。

バルコニーに向かって親指を立てると、それに気付いたアツシも同じように合図を返した。
そして、うしろを向いて誰かを手招きする。
中のＶＩＰ席から出てきたのは……。

（みのりちゃん！？）

相変わらず白いフリフリの服を着ているみのりは、やはり会場で目立っていた。

（マジかよ～）

緊張して、顔が火照ってくる。
バルコニーから身を乗り出して手を振るみのり。このあいだまで、病院にいたとは思えないほどの元気さだ。

そういえば手術を受ける前も、入退院を繰り返していたにも関わらず、みのりは元気に飛び跳ねていた。

そう、あのときまでは……。

その瞬間、大地の脳裏に映像がよみがえってきた。

黒い人の波に飲みこまれていく、白いワンピースを着た少女。
全ての音が消え去り、自分の鼓動だけが耳障りなくらい響いてくる。
胸が、苦しい。呼吸ができない……。

――――ダレカ、カノジョヲタスケテ――――

「……大地？」

メンバーが呼ぶ声に、ハッとする。
今は……ライブの真最中だ。
もう一度バルコニーのほうに目を向けると、みのりがニコニコと笑っている様子が見える。
大丈夫。彼女は今、ちゃんとここにいる。

気を取り直し、大地はスツールから立ち上がった。

「よしっ！ラストまで突っ走るぜ――――！」

客席を照らしていたライトが消え、またステージ上の自分たちの姿だけが会場に浮かび上がる。
大地は、一瞬よぎった不安を振り払うように、ラストまで全力で歌

い続けた。

＊＊＊

「大ちゃん！かっこよかったよー！」

楽屋に入るなり、子犬のように飛びついてきた女の子。
どうやらアツシが、スタッフのパスを使ってみのりを楽屋に連れてきてくれたらしい。

「こら、みのりちゃん！ライブに来ちゃダメだって言っただろ？」

本当は見に来てくれて嬉しかったのだが、言いつけを破ったみのりに一応は怒ってみる。

「ごめーん。でも、バルコニーに出たのはＭＣのときだけだよ？ライブ中は、ＶＩＰルームの中で見てたんだから」
「だったらいいけど……体のほうは大丈夫？」
「うん！なんかすっかり調子がいいみたい」

そう言ってニコニコと笑うみのりは、出会ったころの１６歳の彼女そのままだった。

汗まみれの自分の体に抱きつき、「ビショビショだぁ～」とみのりは笑う。
大地はそんな彼女をそっと抱きしめながら、トクトクという確かな鼓動を確かめた。

大丈夫。彼女は、生きている。

【19】記憶

ステージの上で歌っている大地。
いつものように会場は超満員で、ファンが客席で踊り狂っている。
大地自身もトランス状態で、声を張り上げながら歌い、ギターをかき鳴らしていた。

ライブは最高潮に盛り上がり、ラストの曲が始まる。
そのとき、会場が大きく揺れた。
興奮状態のファンが、ステージに登ろうと押し寄せてくる。

「みんな、落ち着いてくれ――――――！！」

大地はそう叫ぶが、客は誰ひとりとして大地の言葉に耳を貸さない。

このままだと、大事故になる。
そう思いながら客席を見ると、白いワンピースを着た少女がぼんやりとステージの真正面に立っていた。

「危ない！逃げないと、巻き込まれる！」

そう叫んでも、その少女はそこを動こうとしない。
ステージに押し寄せてくる、人の群れ。

白い服の少女は、その波に飲み込まれ――――――。

「みのり――――――！！」

＊＊＊

ハッとして目を覚ます。
あたりは真っ暗で、ここは自分の部屋だった。
時計を見ると、夜中の3時。
心臓が早鐘を打つようにドキドキしている。
体中から汗が噴き出し、喉がカラカラだ。

大地は起き上がり、汗を拭うと、水を飲むために階下へと降りる。

（なんで今ごろ、あのときのことなんか思い出したんだ……？）

今日のライブ会場でみのりの姿を見たとき、一瞬忘れていた記憶がよみがえった。

みのりの兄・辰己の話によると、彼女が祖父である前総帥の怒りを買ったのは、あのライブの事故が原因だったらしい。
彼女自身も、瀕死の状態だった。
病院から姿を消し、誰に聞いてもみのりの居場所は分からない。
無事かどうかさえ確かめられず、無力さを痛感する自分。

あのときの恐怖が、よみがえってくる。
もう一度彼女を失ったら、今度こそ自分は生きていけないかもしれない。

台所で水を飲んだあと、2階のみのりの部屋の前で足を止める。
以前松木が使っていた部屋は、今はみのりの部屋になっていた。

一瞬ためらったあと、そっと彼女の部屋のドアを開ける。
ベッドの中で体を丸め、みのりはすやすやと眠っていた。

「みのり……」

手のひらを、彼女の頬に当てる。
温かな肌。呼吸も確かだ。

みのりを見つけ、昏睡状態から目覚めただけで嬉しくて舞い上がっていた自分。
けれど、彼女の病気は完治はしていないのだ。
ペースメーカーを心臓に入れてはいるが、やはり健常者と比べたらリスクが高いことに変わりはない。

「みのり……」

もう一度その名を呼んだとき、彼女が目を覚ました。

「大ちゃん……？」
「あ、ごめん。勝手に入ってきて……起こしちゃったね」
「ううん。いいよ」

みのりが自分の布団をめくりあげ、大地を中へと招く。
おずおずと、みのりの隣に潜りこむ大地。
目の高さが一緒になったとき、みのりがニコリと笑った。

「あのね、大ちゃんの夢を見てた。ライブで歌っている夢」

さっき自分が見ていた夢のことを思い出し、一瞬背中がざわりとする。

「かっこよかったー。ステージの上の大ちゃんが、やっぱり一番輝いてるね。記憶を失う前の自分も、きっと同じ気持ちだったと思うよ」

キラキラと目を輝かせてみのりが言う。

「何か、思い出せた？」

「……ううん」

彼女が少し表情を曇らせた。

心の底で、早く記憶を取り戻してほしいと願っていることを、きっと彼女は感じ取っていると思う。

みのりのことを第一に考えているはずなのに、結局自分はエゴを通そうとしているのではないだろうか。

「あのさ、もう思い出さなくていいよ」

大地の言葉に、みのりは首をかしげる。

それはそうだろう。今までさんざん、記憶を取り戻すためのことをしてきた大地。

みのりの通っていた高校に行ってみたり、よくふたりで会った公園を散歩してみたり。

何も思い出さないみのりに対して、焦りを感じていたのは否めな

い。
でも、もういいのではないかという気持ちになっていた。
こうして、彼女が自分のそばにいてくれること自体、奇跡なんだ。
「今のみのりちゃんだって、俺は好きだよ。もう一度最初からやり直せて、ラッキーかもしれない。また一緒に、思い出を作れるんだから」
「大ちゃん……」
彼女が、大地の瞳をじっと見つめる。
大地はみのりのふっくらとした唇を、親指でそっと撫でた。
「……キスしていい？」
「え？」
大きな目を、さらに見開くみのり。
思わず言ってしまった言葉に、自分自身びっくりしてしまう。
「あ、ごめん。お兄ちゃんにキスなんてされたら……みのりちゃん、困るよね」
気まずくなって天井を見上げる。するとみのりが両方の手のひらで大地の顔を包み、ぐいっと自分のほうに向けた。
そして、重なる唇。
しばらく触れあってから、みのりはそっと唇を離した。

「ごめんね、大ちゃん」
「……何が？」
久々のみのりとのキスに、大地の心臓はドキドキしていた。
そして、そのあとのみのりの言葉に、大地はさらに驚愕する。
「大ちゃんがお兄ちゃんじゃないって、私、ずっと前から気付いてた」
「え？」
そういえば、いつからだろう。みのりは『お兄ちゃん』とは呼ばなくなっていた。
「この家に来てしばらく経ったころ、果南ちゃんが教えてくれたんだ。でも私、大ちゃんのそばにいたかった。だから、思い出していないふりをしてたの」
「みのりちゃん……」
みのりが、大地の胸にそっと顔を埋める。
微(かす)かに、肩が震えているようだ。
「私、このままここにいていい？」
その言葉を聞いて、大地もハッとする。
もし記憶を取り戻してしまったら、みのりはここを出ていってしまうかもしれない。
本来彼女がいるべきところは、ここではなく、花沢の自分の家だ。
かつて彼女を苦しめていた祖父はもういない。

みのりの父親も兄も、彼女との絆を取り戻したがっている。
彼女が、大地のそばにいるべき理由なんて、どこにもないのだ。

「どこにも、行っちゃだめだ！」

大地がみのりを、力強く抱きしめた。みのりの手も、大地の背中にまわる。
ふたりでしっかりと抱きしめあい、もう一度唇を重ねた。

みのりが自分のもとから去るなんて、考えられない。
彼女のためではない。みのりに依存しているのは、むしろ自分のほうではないか。

音楽だって、いわば彼女がいるからこそ続けているようなものだ。音楽を通して出会ったふたり。だから、歌ってさえいれば、また彼女に逢える。ロサンゼルスにいたときも、そうやって自分に言い聞かせてきた。

「もう、絶対に離さない」

大地がみのりの細い体を組み敷いた。
目を閉じるみのり。
大地は彼女の体に負担をかけないように気を遣いながら、ゆっくりと体を重ねた。

彼女を愛している。

ふたりが一緒にいる理由は、それだけだった。

【20】嬉しい報告

大地とみのりは、かつて彼女が入院していた総合病院の待合室にいた。
3カ月に一度の定期検診。
脈拍も安定しており、ペースメーカーにも異常は見られなかった。
検査の結果を聞き、ホッと胸をなでおろす。

ふたりで広い病院の敷地内を散策していると、「大地にーちゃん！」と突然声をかけられた。
振り向くと、そこにはひとりの女性に付き添われた一之瀬（いちのせ）　幹（かん）と草（そう）の姿があった。
かつて九州の病院に一緒に入院していた兄弟だ。

「なんだよお前、東京に来ていたのか？」
幹にそう問うと、満面の笑みを大地に向けてこう言った。
「今、花沢のおじさんのところにいるんだ！」
「え？」

”花沢”とは、みのりの実家のことだ。そして、”おじさん”というのは彼女の父親のことだろう。
以前病院で聞いた言葉を思い出す。
花沢の家を出ていったみのりの母親は、幹の父親と出会って再婚し、

そのあいだに生まれた子供が草だ。

血のつながらないふたりを、花沢は養子にすると言っていたが――――。

「花沢さんちに？えっと……そこんちの子供になったってこと？」

「なに言ってんだよ。なんか、”こうけんにん”ってやつになったんだって」

後見人……ということは、籍を入れたわけではないのか。

”花沢”という言葉を聞いたみのりの表情が、少し強張(こわば)る。

大地は彼女の手を、ぎゅっと握った。

ニコッとほほ笑みかけると、少しだけ安堵の表情に変わる。

「で、なんで病院に？」

すると、ふたりのそばにいた女性が大地にむかって説明した。

「1か月ほど前に、この兄弟を旦那様が連れてこられたんです。ところが、東京の空気が合わないらしく、草くんの喘息が酷くなってしまって」

「そうなんですか……」

草の喘息のために、九州の病院で療養していたふたり。

そして両親のいないこの子たちの援助をしていたのが花沢氏だ。

詳しい話を聞こうとしたが、これから草の診察だというので、そ

の場で別れた。

病院をあとにし、今度は松木の家に向かう。
なにやら大事な報告があるらしい。

「私、知ってるよ？果南ちゃんがね……」

耳もとでこそこそと囁くみのり。
彼女の言葉に、大地は驚愕した。

「マジ？」
「マジ」

ニコニコと嬉しそうに笑うみのりにつられて、大地も満面の笑顔を見せた。

――――果南ちゃん、お母さんになるんだって。

＊＊＊

「まだ安定期にも入っていないのに、祐輔ったら大騒ぎなのよ？」

ソファに腰を下ろし、うんざりしたように話す果南。
かたや松木は、台所とリビングを忙しく行ったり来たりしている。
妊娠中の果南に代わって料理を作っているらしい。

「松っちゃんって、そういうキャラだったんだ。松木のおばちゃんには『全然手伝わない』って言われてたのに」

「妊娠初期が一番大事だっていうからな。果南に無理はさせられん」
「だからってね、一日中ソファに座っているのも苦痛なのよ？過保護すぎるのも問題だと思うわ」

口では不平を言うものの、果南も松木も幸せそうだ。

エコー写真を見せられ、「これが心臓でね、これが頭」などと説明される。
松木はすでに親バカ全開で、「かわいいよな。果南に似た、女の子がいいな」などと頬を緩ませている。
みのりは興味深そうに聞いているが、大地にはその画像が黒い塊にしか見えなかった。

（かわいいなんて、なんで分かるんだ？）

「ねぇねぇ果南ちゃん、赤ちゃんが生まれたら、私にもお世話させてね？」
「もちろんよ」
「よかった。私たちにも赤ちゃんができたら、一緒に遊ばせたいね」
「みのりちゃん！」

大地に向かって嬉しそうに話すみのりの言葉を、慌てて遮った。
松木と果南はお互いに顔を見合わせ、ニヤニヤしながら大地の顔を見る。

「なんだよお前ら。いつの間にそんな関係になっていたわけ？」
「ど、どうにもなってないよ！」

真っ赤になって否定する大地。

「だって、お医者様が言っていたじゃない。ペースメーカーが入ってても、ちゃんと出産はできるって」

そうなのだ。今日の検診のとき、みのりは担当医に向かって「ペースメーカーが入ってると、赤ちゃんは産めないんですか？」と突然切り出した。
ギョッとする大地を、担当医はしげしげと見つめる。
そしてみのりに向かってこう言った。

「ちゃんと専門医のチェックを受けながらだったら可能です。ただ、リスクは高いですよ？まぁ普通の人にとってもお産にリスクは付きものですがね」

そのとき見せた、みのりの幸せそうな表情。
きっと果南のことを聞いていて、自分も赤ちゃんが欲しいと思ったに違いない。

「でも、みのりちゃんは果南さんとは違うんだよ？リスクが高いって先生も言ってたじゃんか。俺は反対だよ」

大地がみのりをたしなめる。
普通に生活していても、やはりいろいろと気をつけなくてはいけない彼女の体。
ましてや出産なんて、大きな負担がかかってしまう。

「だって、私が死んだら、大ちゃんひとりぼっちになっちゃうでしょ？だから、家族を作ってあげたいの」

みのりの言葉に、その場が一瞬シンとなった。

ニコニコと笑いながら、大地に「ね？」と言う彼女。大地はなんと返していいか分からない。

すると果南が、クスリと笑った。

「みのりちゃん、小さい頃、赤ちゃんのお人形をずっとおんぶしてたもんね。でも、本物の赤ちゃんをいっぺん世話してごらんよ。たちまち嫌になるから」

「えー！？そんなことないもんっ！嫌にならないもんっ！」

「いーや、たぶん赤ちゃんと一緒にみのりちゃんも泣くと思うよ？で、大地くんが子供を抱えながら、全国をツアーして回るの！あははは！」

豪快に笑う果南の横で、みのりがふくれっ面をしている。

その様子を見て、松木が爆笑した。

「松木さんまで、ひどい！」

怒るみのりに向かって、松木が言う。

「子連れでライブをする大地を想像したら、笑えてさ。いや、大地なら本当にやりかねん」

涙を流しながら肩を震わせる松木。どんな想像をしているのか、安易に予想がつく。
ああもう、勝手にしてくれ。
大笑いする松木と果南。その横でふてくされるみのり。そして呆れながらその様子を眺める大地。

そんな午後のひとときを、一本の電話のベルが遮った。
「はい、松木です」
果南が受話器を取る。そして次の瞬間、彼女の顔が青ざめた。
「なにを今さら……！私は一族とは縁を切りました。そちらに伺う義理はありません」
怒りを含んだ口調に、ただならぬものを感じる。
向こうでなにやら言っているようだが、果南はまるで耳を貸さない様子だ。
「代わって」
松木が果南から受話器を受け取り、冷静な態度で対応する。
そばにあった紙にメモを取りながら、「はい」とか「わかりました」と繰り返す。
「わかりました。ただ、果南はまだ安定期に入っていません。だか

らそちらには私が出向きます。それと、みのりの代理で大地が行きますので」

自分の名前が出たことに驚愕する。
みのりの代理……？どういうことだ……？

松木が電話を切り、見守っていた大地らのほうを振り返る。

「花沢の……果南の母親からだった。今度の日曜、近しい親族だけで会食をするらしい。みのりちゃんにも来てほしかったらしいが、今はまだ無理だろう？代わりに大地が行ってくれ」

「……俺？」

「ああ。現総帥や後継者の辰己さんとは面識があるだろ。蛇の穴に飛びこむようなものだが、俺も一緒だから」

以前松木とともに塀の外から見た、みのりの実家を思い出す。
重厚な門。そして、敷地をぐるりと取り囲む高い塀。
外側から見ただけでも威圧感のあるその屋敷に、松木とともに乗り込むというのか。

みのりが不安そうに大地の顔を見つめている。
”花沢”という名前を聞くだけで、あれほどまでに怯える彼女。そして、父親に対する異常なまでの拒否反応。
あの家の中に入ることができれば、何か分かるだろうか。

「分かった。俺、行ってみる」

大地は覚悟を決めた。彼女を本当に守っていくなら、いつかは向き合わなくてはいけない壁だ。

「私も行くわよ」

そう言う果南に、松木が抗議の声を上げた。

「お前はやめておけ。感情的になって、まとまる話もまとまらなくなる」

「大丈夫。こうやって私に電話をかけてくるくらいだから、むこうだって変わったのよ。一族のトップもおじさんになったんなら、話だって通じると思う」

一族と縁を切った果南。そして、激しく怯えるみのり。

いったい花沢家とは、どんな一族なのだろうか。

大地の心に不安がよぎる。

だが、この先みのりと一緒の人生を歩んでいくつもりなら、自分は真実を知らなければいけない。

【21】花沢の家

「松っちゃん、ヤバいよ。震えてきた」
「アホ。堂々と胸を張れ。お前だって一応有名人なんだ」
「んなこと言ったって……」

この日のためにスーツを新調し、慣れないネクタイを締めている大地。
黒塗りの高級車が迎えに来たときは、思わず逃げ出しそうになってしまった。
先に松木と果南が乗っているのを見て、ホッと安堵し後部座席に乗り込む。
だが場違いな高級車に、大地は身の置き場がなかった。

（髪、黒くしといてよかった……）

「出発してもよろしいですか？」

運転手にそう聞かれ、大地は「ちょっと待っててください」と言って車のウインドウを開けた。

「みのりちゃん、行ってくるからね。何かあったらすぐに連絡するんだよ？」
「大ちゃん……」

不安そうに大地を見つめるみのり。
その傍らには、幹と草、それから付き添いの女性が立っている。

「すみません……留守中よろしくお願いします。幹、みのりちゃんを頼むな」

それぞれに挨拶をし、見送るみのりらに手を振った。

いつも留守番を頼んでいる果南は、今回は一緒に行動する。だから今日は、九州の病院で仲良くなっていた兄弟を家に呼び、一緒に過ごしてもらうことにした。付き添いの女性は、花沢家専属の看護士らしい。

もうすぐ２０歳の誕生日を迎えるとはいえ、長い間眠り続けていたみのりは、まだ頼りない子供のようなものだ。付き添いの女性に事情を説明し、「くれぐれも頼みます」と大地が言うと、その女性は「心得てます」と答えた。長年花沢家で働いていると言っていたから、もしかしたらみのりのことも知っているのかもしれない。

首都高を下りてしばらくすると、車は高級住宅街へと入っていった。そして大きな門の前で静かに停車する。

大地と松木夫婦が無言で車を降りると、インターフォンを押す前に、その重厚な扉が静かに開いた。

「いよいよだな……」

ゴクリと唾を飲み込む。普段は冷静沈着な松木も、さすがに緊張しているようだ。

使用人らしき人が出迎えてくれ、中へと通される。
手入れの行き届いた日本庭園を横目で見ながら、大地らは豪邸という名がふさわしい屋敷の中へ案内された。

長い渡り廊下を歩いている途中、庭の向こうに小さな離れがあるのを見つける。

「あれがね、みのりちゃんの部屋だったの。今は幹くんと草くんが使っているみたいね」

家族が一緒に住むには、小さな造りの平屋。大きな豪邸とは明らかに隔離されたその建物に、大地は違和感を感じた。

「あの離れを、彼女ひとりで使っていたんですか？」
「ええ。昔は母親と住んでいたらしいんだけど……。この屋敷だって、家族が揃うことなんてほとんどないわ。だからみのりちゃんも、大きな屋敷にひとりでいるよりはあの離れにいたほうがいいって言ってたの」

出会ったころ、みのりは同じ病棟の患者たちと家族同様の付き合いをしていた。
みんなに可愛がられ、楽しそうにしていたみのりの笑顔を思い出し、胸がチクリと痛む。
自分の家よりも病院のほうが、人のぬくもりを感じられるなんて……。

『家族になろう』――――そのひとことに、彼女のどんな想いが込められていたのだろう。

渡り廊下の突き当たりにある、広い座敷に通される。
そこには、二組の夫婦と、みのりの兄である辰己の姿があった。

「お久しぶりです」

そう言う大地に、辰己は笑顔を向けた。

「みのりの様子はどうだい？」
「はい。このあいだ病院で定期健診があって。なにも問題はないそうです」
「そうか、よかった」

最初に会ったときは、あまりのよそよそしさに『本当に彼女の兄なのだろうか』という印象を抱いていた大地。
だが、九州の病院にもたびたび訪れてくれ、東京に戻って来てからもみのりの様子を気にしてくれる辰己の姿に、少しずつ信頼感が芽生えていた。

テーブルの反対側では、松木と果南が同席していた2組の夫婦に挨拶をしている。
厳格そうな雰囲気の年輩の夫婦、そして松木らよりも少し上くらいの、若い夫婦が並んで座っていた。
若いほうの女性は、果南にそっくりだ。ということは、彼女の姉かなにかなのだろう。
そして年輩の夫人のほうも、彼女らに雰囲気がよく似ている。

松木のそばにいったほうがいいのかと考えあぐねていると、スッと襖(ふすま)が開き、みのりの父親と老婦人が座敷に入ってきた。
そこにいた全員が居住まいを正し、ピリッとした緊張感が走る。

一番上座に総帥である花沢が座り、そのすぐ横に老婦人が着席した。
後継者であるはずの辰己は、なぜか大地のすぐ隣に座っている。
テーブルを挟んだ向かい側には、上座の近くに年輩の夫婦、そしてその娘夫婦と松木らが並んでいた。

「ずいぶん部外者が多いこと。それに果南さん、あなた勘当された身で、よくのこのこと顔を出せたわね」

無表情で辛辣(しんらつ)な言葉を述べる老婦人。

「お言葉ですが、勘当されたわけではありませんわ。自分から出ていったんですもの」

皮肉を返す果南の言葉にも、その婦人は表情を崩さない。

大地は、その場の異様な空気にすっかり怖気づいていた。
慣れない正座に足がしびれてくるが、足を崩していいかなどととても聞けるような雰囲気ではない。
すると、上座に座っていたみのりの父親が、大地のほうに目を向けた。

「峰屋敷くん、わざわざ来てもらってすまないね。間もなく食事も運ばれてくるから、足を崩して楽にしてくれ」

「はい、すみません……」

花沢にそう言われ、ようやく大地も息がつけたような気がした。足を崩してしばらくすると、花沢の言葉通り、立派な御膳に乗せられた食事が運ばれてきた。

（食事なんて、喉を通らないよ……）

まるでお通夜のように黙々と箸を進める花沢の親族。近しい親族での会食……という雰囲気ではとてもない。

「ところで果南ちゃんは、おめでたらしいね」

沈黙を破って、花沢の総帥が口を開いた。

「はい。3カ月に入ったところです」

心なしか、果南の表情も少し緩んだような気がする。ところがその和みかけた雰囲気を、またもや老婦人が引き裂いた。

「もし男子が生まれたなら、花沢の継承権を得られるものね。せいぜい大事にしなさい」

「この子は松木家の子供です。花沢とは関係ありません！」

果南がきっぱりとそう言った。

老婦人と娘の険悪な様子にも関わらず、果南の両親は何も言わず、ただ黙々と食事を続けている。

松木だけが、激昂する果南をなだめるように、テーブルの下で彼女の手を握り続けていた。

老婦人は、冷ややかな目をその場にいた全員に向ける。

「そうは言っても、今この花沢家の跡継は辰己だけです。それもあの女が産んだ子供なんて、この先花沢家もどうなることやら」

”あの女”とはみのりの母親のことだろう。

本人を目の前にして発せられる信じられない言葉の数々に、大地はだんだん気分が悪くなってきた。

（こんな家じゃ、みのりちゃんだって思い出したくもないだろうし、お母さんだってそりゃ出ていくよ！）

自分の意見をきっぱり述べる果南に対し、その両親も姉夫婦も始終無言だ。

だから果南も、自ら家を飛び出したのだろう。

老婦人は、今度は大地のほうをじっと見据える。

いや、もしかしたら隣にいる辰己を見ていたのかもしれない。

「みのりといい、今度屋敷に連れてきた得体の知れない子供といい、かなり病弱らしいわね。あの女の遺伝子はなにか欠陥があるんじゃないかしら。悪いことは言わないから、後妻を娶（めと）ってもう一人後継者にふさわしい人間を作りなさい」

「叔母上、何度も言いますが、私は再婚する気などありませんよ」

みのりの父が、老婦人にそう言った。”叔母”ということは、亡くなった前総帥の姉妹なのだろう。

老婦人の言わんとすることは、辰己を後継者候補からはずし、後妻の産んだ子供に跡を継がせるということだ。
辰己がこの場にいるにも関わらず発せられたその言葉に、大地は愕然とした。

隣にいる辰己の様子を見ると、表情を崩さず、ゆっくりと箸を進めている。
どうしてこの家の人間は、あの人に対して何も言わないのだろう。

大地はこの信じられない親族のやり取りに、憤りを募らせていた。

【22】心の闇

そのころみのりは、大画面テレビの前で、一之瀬兄弟とゲームの対戦をしていた。
普段から大地と一緒にゲームをしていたので自信満々で勝負にのぞんだのだが、小学生の男の子相手に悪戦苦闘する。

「みのりちゃん、下手だなぁ」

ゲームの相手をしていた草が、勝ち誇ったように笑う。
みのりはムキになって言い返した。

「大ちゃんにはいっつも勝つもん！」
「それって、大地にーちゃんが手加減してるだけだって」
「くやしい！もう一回勝負しよっ！」

その様子を見て、幹は「どっちが子供なんだか……」と苦笑する。

「さぁさぁ、ゲームはその辺にして。お昼の準備ができましたよ」

木崎さんという兄弟のお世話をしている女性が、お盆にどんぶりを乗せてリビングに入ってきた。

「わぁ！親子丼だぁ！」

３人そろって目を輝かせて喜ぶ姿に、木崎の表情も緩む。
大地の家にはラーメンどんぶりしかなかったので、大きな器に上品に盛ってある親子丼は妙に違和感があった。

「大ちゃんはよくラーメンは作ってくれるんだけど、こういう和食は作るの苦手みたいなんだよね～」
「あら、みのりちゃん、大地くんにお料理させてるの？」
「え？あ、うん……」

木崎にそう突っ込まれ、みのりは真っ赤になる。

そうだ。普通なら自分のほうが食事の支度をしなくてはならないのに、仕事をしている大地に家事全般もやらせてしまっている。ひとり暮らしの長い大地が全然嫌がらずにやってくれるので、みのりもすっかりそれに甘えてしまっていた。

（こんなんじゃ、大ちゃんのお嫁さんになんてとてもなれないな……）

４人で食卓を囲み、親子丼に箸をつける。

「おいしいっ！」

ダシのきいたつゆ。鶏肉は柔らかく、卵もふんわり半熟だ。

「木崎さん、天才っ！」
「なに言ってるの。コツさえつかめれば簡単よ？」
「そうなの？じゃ、作り方教えて！」

こんなにおいしい親子丼。作ってあげたら、大地はどんな顔をするだろう。

「じゃぁ、午後はお料理教室ね」
「はい！先生、お願いしますっ！」

みのりは子供たちと一緒に、急いで親子丼を平らげた。

午後は、幹が弟の草に勉強を教えることになっていた。
草は病気のためになかなか学校にも行けず、人見知りをするため家庭教師をつけるのも拒否しているという。
それに、これ以上の経済的援助は受けたくないという気持ちもあるようだ。

父を早くに亡くし、母親も働きに出ていたため、小さい頃から兄の幹が弟の面倒をみてきた。
そのため、幹は小学校5年生ながらものすごく大人びている。

（私も頑張らなきゃ！）

みのりは張り切って台所に向かった。

木崎と並んで台所で昼食の後片付けをし、そのあと料理にとりかかる。

「親子丼はできたてのほうがおいしいから、夕食の準備のときに一緒に作りましょう。和食がいいなら、煮物でも作ってみる？」

「煮物？」

いわゆる”おふくろの味”というやつだろうか。そういえば、果南がときどき『松木のお義母(かあ)さんから預かってきた』といって、肉じゃがやキンピラゴボウなんかを持ってくる。

「じゃぁ、肉じゃが」

肉じゃがを見たときの大地の嬉しそうな顔を思い出し、みのりは即座にそう答えた。
大好物の肉じゃがをおいしく作れるようになったらどんなに喜んでくれるか、想像しただけで頬が緩んでくる。

材料は全て冷蔵庫に入っていたので、下ごしらえから取りかかる。
危ない手つきで包丁を持つみのりを、木崎は手を貸さずに見守った。
なんとか材料を切り終え、鍋で炒める。油の跳ねる音を聞いているだけで、みのりはワクワクしてきた。

「あとはしばらく煮込んでいればいいから」

調味料とだし汁を入れて落とし蓋をしたあと、木崎がニッコリ笑ってそう言った。
その笑顔を見た瞬間、みのりの脳裏によみがえる記憶。

「私、前にもこうやって木崎さんに料理を教えてもらったことがある？」

台所で悪戦苦闘しながら何かを作っている自分。そして必要以上に手を出さず、見守っている女性の姿。
一緒にいたのは果南だっただろうか。

いや違う。自分の母親と同じくらいの、雰囲気の柔らかい女性だったような気がする。

「そうね、何度か一緒に料理したことがあるわよ？そういえば、みのりちゃんが彼氏にクッキーを作ったときも、私が教えたのよね」
「彼氏？」
「たぶん、大地くんだと思うわ。バンドを組んでいる彼氏って言っていたから」

昔の自分は、大地にクッキーなんかを作るような子だったんだ。全く記憶にないが、妙に照れくさい。

「みのりちゃん、ＣＤや切り抜きなんかを一生懸命集めていたわ。今度デビューするって言ってたけど、まさかあんなことになるなんて……」
「え？」

すると木崎は、ハッとしたような表情を見せ、慌てて話題を変えた。

「そういえばね、幹くんもギターをやっているみたいなの。大地くんのＣＤを聞いて、一生懸命練習しているのよ？」
「ギター？」

そういえば、入院しているときも大地によく教わりに来ていた。根気よく基本のコードを教えている大地の姿を見て、なんだか懐かしく思ったっけ。
そして自分も、弟の草にキーボードを弾いてあげた。

「リハビリにもなるから」と言って大地が用意してくれたキーボード。
思い浮かぶメロディーを、なんとなしに弾いていたことを思い出す。

「幹くんも草くんも、将来大ちゃんと一緒に音楽をやったりして」
「そうね。あの子たち、環境が変わっても楽しみを見つけて頑張っているわ。旦那様も、ずいぶんと気を遣っているみたいだし……」

「でも、あの家に俺たちの居場所はないよ」

そう言って台所に入ってきたのは、草に勉強を教えていたはずの幹だった。

「幹くん……」
「みんな言っていた。あの家を出ていった人の、汚れた血を引き継いだ子だって。要らない子だって、みんな言うんだ」

唇をかみしめながらそんな言葉を吐き出す。

「要らない子……？」

その瞬間、みのりの心を黒い闇が支配した。

”要らない子””汚れた子””欠陥品””この家を不幸にする子”……。

ぐるぐると、そんな言葉が頭の中を駆け巡る。

『お前には、花沢の血なんて一滴も入っていない』
『お前の淫らな母親が、別の男と通じて産んだ子だ』
『疫病神。お前がこの家を不幸にする』

老人が、憎悪の目を向ける。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

頭が、割れるように痛む。
子供のころから浴びせ続けられた、そんな言葉の数々。
忘れていた恐怖がよみがえる。

あの家には、味方なんてひとりもいなかった。
私を理解してくれたのは、いとこの果南だけ。
そしてありったけの愛情を注いでくれたのは、病院で出会った大地だけだった。

『お前の男なんか、潰してやる』

「だめぇ！大ちゃんには何もしないでぇ！！」

その瞬間、みのりの意識はふつりと途絶えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7425x/

LOVE SONG～君に逢いたい～

2011年11月7日08時15分発行